

魔法少女リリカルなのはViVid Another Story

インド人を右に

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Vivid Another Story

【NZコード】

N1710X

【作者名】 インド人を右に

【あらすじ】

初等科最終実技試験の成績は学院内ワースト。

St.・ヒルデ魔法学院中等科1年生の市ノ瀬涼は、魔法の才能皆無な所謂落ちこぼれ。

「落ちこぼれにも意地がある」と日々練習に明け暮れる彼が、出会ったのは 転生でもなんでもない普通のオリ主もので、基本的に原作通りに進む予定。主人公最強とかではないのでその手の作風が好きな人は回避した方がよろしいかと。気軽に感想下さると嬉しいです。

第1話

次元の海の中心世界“ミッドチルダ”

ジエイル・スカリエツティが首謀となつて起こした都市型テロ“J.S.事件”から4年経過したそんな年。

そして俺 市ノ瀬涼の人生を左右した、あの事件からも丁度4年

目の年。

鮮烈な物語の始まりなんて、全く予想もしていなかつた。

始まりの季節 世の中的には入社式や入学式であつたりするわけ
で。

心機一転、生活態度を戒めるのにも都合が良い季節である。
そう思いつつも、あくまでいつも通りに背を丸めたまま道の端を歩
く。

ちなみに視線は下向き。アスファルトとお見合い状態である。
改善すべきはこういう所なのだろうけれど

「あ……あれって 」

「よく平然とやって来られるなあ

「ある意味大物だな。ハハ」

とまあ、こんな中傷的な視線と言葉のお陰で改善出来ず、1年ほど経過してしまっているのが現状である。

だが、全てが彼等のせいと言うわけでもない。

向上心が欠けている性分だから、もう色々と諦めて生きて来た人生なのだから。

「はあー」

溜息を吐いて、歩みを速める。

俺は学院が嫌いだ。

St・ヒルデ魔法学院 それが俺の通う、所謂“魔法使いのための”学校である。

まわりは当然将来の魔導師さんたちで溢れ返っている。

取り分けて本学院は学院生たちの偏差値が高めであるため、殆ど魔法の使えない人間が紛れ込んでいれば、その場違いな存在に浮いてしまうことは必至。

その“魔法が殆ど使えない人間”というのが、俺 市ノ瀬 涼である。

元々魔法文化圏外出身のため、使えること自体が奇跡だったようですが、その奇跡で全ての運を使いきってしまった感が否めない。

魔力の総量はFランクにも満たないという現実をつきつけられれば、そんな風に思えてしまう。

魔力総量は俺くらいの年だとまだ伸びる望みはあるのだが、数年前から増えている様子は皆無。

成長期を超えると、滅多なことがない限り増えたりなんかしない。
ある程度魔力に余裕があるのなら、努力でいくらでもカバーしきれるだろうが……俺の場合出来ることなんて限られている。

魔力使用効率向上による魔力節約。
魔法高速運用。

この程度のものだ。

魔力使用効率は術式の簡略化や、不用な魔法効果を取り除くことでその分魔力を節約するなどだ。

同じ魔力を使うにしても出来るだけ見返りの多い方が良い。
他の連中からすれば本当に些細なモノかもしれないが、俺に取つちやそれすらも“勿体無い”と感じる。

必ずしも魔力量で魔導師ランクが決まるわけではない、という点が唯一の救いだろうな。

就職先が管理局以外って言つのであれば、今悩んでいる全ての事柄は気にせず済む。

それでも、どうしても諦められない理由は一体何なのだろうか？

実に単純で不純な動機。

憧れなんてのは、ほんの三割程しかないのだから……

大半を、過去へのケジメのためだけに費やしている　他人の前では綺麗事ばかりを並べた動機を語っている。

それを告げる度　嘘を吐く度に、心のどこかが痛む。

動機を知る知人は「復讐なんて下らない」なんて言葉を口にしたが、その意見には俺自身も同意するしかない。

馬鹿らしきつて事は分かつてはいるけどな……

でもまあ、今ままじゃ局の魔導師にすらなれない。魔法を使える者を魔導師として定義するのであれば、現時点では達成しているのだが、 “局の” と頭に付く事で随分と難易度が上昇してしまう。

「はあ……」

漏れた溜息は本日何度目だろうか。

それと同時に湧き上るのは、自身の不甲斐無さに対する呆れ。

St・ビルデ魔法学院中等科一年の実技成績最下位。

これは、中等科へ進級した現時点での暫定成績だ。

まあ簡単に言えば、初等科の最高学年で最下位の結果を残している、ということである。

最下位は俺の指定席で、この順位以外は取った覚えがない。

優秀ならば当然目立つが、その逆もまた然り。別に目立たたくないのに、目立つてしまう。この目立ち方は不名誉なので、喜ぶべきではないことは明白だらう。

新しいクラスを早々と確認して、回りの生徒達のよつと一喜一憂することもなく自分のクラスへと向かう。

誰が何組かなんて些細な問題だ。

精々陰口叩くようなクラスメイトが少なければ良いなあ、なんて言う希望があるくらいのものだ。

廊下を歩いていても、自分の存在だけが浮いているような感覚を覚える。

周りの喧騒とは別に響き渡る、廊下を靴底が叩く音。その音だけが妙に異質に感じてしまう。

廊下を歩いているだけで、辺りの人間がわざわざ道を通してくれたり、よく分からぬいけど謝られたり、すれ違い様に舌打ちされたり。学院内においての俺の立ち位置なんてのは、入学当初からずっとこんな感じだ。

誰からも嫌われて、おおよそ友人と呼べる存在もなく、独りで居る。まあ、よつは根暗なわけだ。

中等科の建物は初等科とは異なるため、周りをキヨロキヨロと見渡しながら歩く。

とは言え、初等科棟の造りとは、ビックリなく似ているため、ある程度の位置情報は掴めた。

真面目な優等生ならば、初等科後期にあつた、中等科棟見学のイベントでこの建物の構造を把握している事だろつ。

生憎、俺はそんな生真面目な学生ではない。

かと言つて、そこまで不真面目な学生でもない。

周りからは、不真面目、不良、問題児、なんて風に思われている。

俺としても、そう思われるであろう節が幾つも思い当たる。

「 うと、ここか……」

考え方をしながら歩いていたため、危うく通りすぎるとこだつた。中からは喧騒が響き渡つて来ている。

どういう反応をするか分かつてはいるものの、少しは緊張する。人の印象は第一印象で決まると言つ話もある事だし、ここはいつも爽やかな作り笑顔で教室に入る事にしよう。

「よし……」

意を決して教室に踏み込むと、一瞬教室全体が重々しい雰囲気になる。

その後、何事もなかつたかのように会話が再開される。

幾つか視線を感じるが、きっと俺が会話の着にでもなつているのだろう。役立てたよつて何よりだ。

そして何より、さつきの魂胆がまるで役に立たなかつたらしい。あんな本を無駄だと分かつていながら、熟読していた自分が恥ずかしいなあ。

何が、“第一印象は田で決まる”、だよ……

俺の場合、悪い噂が先行しそぎて、アテにならんぞ。

どうやら今年も、改善される事なく1年を過ごす事になりそうだ。

始業式的なイベントを終えて、今日は解散。

万国　いや、あらゆる世界を通してお偉いさんの話は長いものらしい。

ある意味、様式美なのかもしれないな。

俺は図書館へと足を運ぶ事にした。

いつも言つた特別な教室、施設は、初等科、中等科で共用している。

この学院には、ベルカ式の魔法技術関連の書物が特に充実しているため、放課後はちょくちょく利用させてもらつていてる。

聖王教会のお膝元で運営されているから、ベルカ式関連が揃つてゐるんだろうな。

普段中々お目にかかるない古代ベルカ式関連の書物だけでなく、古代ベルカの歴史書なども充実している。

一説によると、無限書庫から寄贈されている本もあるらしい。

流石は聖王教会、流石は歴史あるルテ・ヒルデ魔法学院。
無限書庫の方にまでコネがあるとは驚きだ。

寄贈が珍しい事なのかは知らんが、少なくともそんなに頻繁にある

事じやないのは事実だ。

図書館に足を運ぶ理由

何百年なんて単位で見れば、俺のような悩みを抱えた人も大勢いる。魔力運用関連の知識なんかは、彼等の経験を糧として勉強させてもらっている。

その彼等が記した本を読む事で、少しでも前へ進めるように……

「またハズレ引いちまつたな……」

図書館で本を読みはじめてから一時間程経過したところで、ポツリと独り言のように呟く。

新書で“ミッド式及び近代ベルカ式の使えるーー100の魔法”とい
うあからさまにハズレ臭漂う題名。

そのくせ、値段の方は結構高め。

やっぱ専門書つてのは高いもんなんだなあ……

そう思いつつ、出版社と著者名を確認。

この一つの名称が一致する本の閲覧は、今後控える事にしよう。
後書きを見ても、そこまで知識のある人物のようには思えない。
加えて、殆どの項目が別の本から直接引用したような手抜き。

誤字や脱字も目立つ上に、現段階で証明されていないような事項に
関しても、そうであるかのように書かれている。

「ま、金も払わずに読んでもるんだし、文句言つのはおこがましいか
……」

根暗な性格故か、他人の揚げ足取りに関してはかなり自信がある。
自慢にならねえよなあ……

パラパラと本を軽く読み返していくと、大きく取り上げられている
魔法があった。

それを見て一言

「こんな魔法使えるか……」

見ているのは射撃魔法関連の項目。

中距離の、しかも誘導射撃つて……一体どれほどの魔力を消費する
と思っているんだよ。

魔力量の少ない俺からすれば、魔力の塊を飛ばすような射撃魔法は
そう易々と使えたもんじゃない。

それにただ飛ばすだけなら大抵当たらぬし、簡単な防御魔法一つ
で完封される。

故に基本的には、膨大な魔力を利用したバリア無視のごり押し、バ
リアブレイク効果、誘導機能なんかを備えるモノが多い。

当然そんな複雑術式満載の魔法は、消費魔力が桁違いに多くなつて
しまう。

まあ、男としては超長距離砲撃魔法なんてのは憧れるよなあ……
魔力の少ない俺にもっとも適した魔法は

「やっぱ、これだよなあ……」

本の目次にある、その項目に自然と目が行く。

身体強化

魔力による運動能力の向上で、消費魔力自体は基本的に少ない。
消費魔力が少ないとはいえ、どれだけ向上させたいか、身体の魔力
疲労限度、魔力特性、魔力効率などなど考慮すべき点は非常に多い。

しかし、この戦闘スタイルだと実質的な攻撃可能範囲はクロスレンジからミドルレンジが精々で、ロングレンジ型相手にはまるで歯が立たない。

近づく前に殺られるのが、容易に想像できる。

アレを使えば、相手自体は楽なんだけど。

寧ろ使つてゐるときは、近接型の相手の方が厄介だから、何とも皮肉
と言ひか……

それ以前にクロスレンジ、ミドルレンジ つまり、同じレンジであつたとしても、強化に割ける魔力が少ない俺は力負け必至な上に、ロングレンジの砲撃魔導師の強固なバリアは真正面からじや破壊不可能。

近距離、中距離、遠距離 いずれの状況であつても勝てる見込みなんて1%あれば良い方だ。
結局のところ、俺が魔導師相手に正々堂々と勝負して勝利するなんて、絶対にあり得ないってわけさ。

パタンと本を閉じて、天井を仰ぐ。

だが、それはあくまで真正面から向き合つて勝負した場合の話。

俺はまともに 真正面からやつ合つつもりなど毛頭ない。

どんなに卑怯だと言われようが、俺は勝つためなら何だつとしてやる つてのは大げさだが、勝つための最大限の努力はするつもりだ。
いや……今までそうして來たんだがなあ。
いかんせん結果が伴わない。

やはり、いい加減魔導師にならなくて夢はずいぱり諦めるべきなのだろうか？

いやいや……まだ可能性がないってわけでもないんだ。

これから一気に魔力量が増える可能性だって、なにごともないし……

「やうじえぱ、ヴィヴィオつて自分専用のデバイス、持つてないんだよね」

「それ、フツーの通信端末でしょ？」

「そーなんだよー。うちのママとその愛機がけっこー厳しくって

ふと考え方をしていると、学院初等科の生徒たちが話し込んでいる姿が視界に入った。

先程も触れた様に、図書館は共用している施設の一つ。

初等科の生徒が居ると言つのは向らおかしくもない事だ。

ああ、ちょくちょく図書館で見かける子たちだな。
特にオッドアイの子。

目を細めて彼女を見る。

変わってるよなあ……魔力光が虹色だろ?
彼女以外で見た事がない。

かなり珍しいな。

血液型診断、みたいなノリで魔力光診断なんてのも存在するらしい。
クラスの女子はそれで盛り上がっていた。
魔力光診断で、虹色なんて項目あるのだろうか……?
俺の場合、見なくても結果はある程度予想出来ちまうんだけどな。
根暗な俺にピッタリの魔力光だしね。

ちなみに俺が、魔法を使ってもいない相手の魔力光の色が分かるの
にも、ワケがあるんだが……ま、今は語るほどの事でもない。
本当に些細なことだ。

パタパタと先程の女の子たちが、目の前を急ぎ足で通過して行った。
ふと、オッドアイの子と目が合つた。

ペコリ

笑顔で会釈された。こちらの軽く頭を下げる。
綺麗な髪がサラリと肩から落ちる。

窓から差し込む夕日に照らされて幻想的な美しさを醸し出していく
も、“綺麗だ”なんて簡潔な感想しか出てこない。

若いなあ……

その割に礼儀正しい子だ。

「ヴィヴィオ、今の人知り合い？」

「つづん。図書館でよく見かける人。さつき騒いじやつてたでしょ」

「リオ、気付いてなかつたの？いつも見かける先輩だよ」

他人の会話に聞き耳を立てる、と言つのは自分でもどうかと思つが、勝手に耳に入つて来るのは仕方がない。

どうやら、向こうもこちらの顔を覚えていたようだな。

ツインテール、ショート、ロングヘアの先程の3人組は、学院内じやあ結構有名だつたりする。

その容姿もそうだが、魔法関連の成績がトップクラスだ。

それにオッドアイの子は、あの“高町なのは”の娘だそうだ。

オーバーランクの空戦魔導師で、砲撃魔導師の典型みたいな人だと聞き及んでいる。

かのJ.S事件の解決にも尽力した、非常に優秀な人だ。

彼女の魔力の1000分の1でも俺にあれば……いや、10000分の1でも良い。

「くつだらねえ……」

ポツリと呟く。

優秀な人とばかり比較して、地味に落ち込んでいる自分がバカバカしくなってきた。

ついでに、嫌気も差してきた。

俺は俺だ。

だから別に気負う必要なんてないし、俺の生き方を否定するなんて他人にはできない。

再び天井を仰ぎ見る。

俺にもたつた1つだけ

“切り札”と呼べる代物がある。

「.....」

目を閉じた。

視えたのは一筋の光。

第1話（後書き）

ご覧いただきありがとうございましたが、再投稿作品です。

あらすじの項目にも書いてありました、再投稿作品です。
設定がある程度被ついていても、展開が全然違つから問題なし。と言う意見を沢山いただきましたので、再投稿するに至つた次第です。
これに関して問題がある場合は、感想かメッセージの方へお願ひします。

その際は、具体的な問題個所などを提示して頂けるとありがたいです。

設定などは消去前と一切変更はなく、説明や会話文の追加。

今回は前回より3・57KB増。

展開が様変わりする事はないと思いますが、戦闘シーンに関してはかなり書き直す事になると思います。
感想を頂けると凄く嬉しいです。

ではでは

「よし」「

日が暮れたのを確認してから、家を出た。
母さんにバレるとまた怒られそうだけれど、幸い今日は遅番なので、
後4時間は帰つて来ないだろう。

母さんは言つても、実の母親ではない。

実の両親を亡くした俺を引き取つてくれたんだ。
でも血の繋がりつてのは多少はあるだろうな。

何せ、俺の実父の妹が今の母さんなのだから。
だから、戸籍上親子関係になつても名前の変更なんかは一切なかつ
たわけだ。

ちなみに行く先は公共魔法練習場。

その名の通り、魔法を練習する場所なわけで。
昼間はそこそこの利用者数を誇つてゐるが、日が暮れると流石に利
用者は限られてくる。

巡回中の局員さんに職務質問され、補導された経歴もあつたが……

その時、何故か指紋を採取されたんだが、俺はそんなに凶悪な顔をしているのだろうか？

まあ、この際どうでも良いや。

今は練習が優先だ。

そもそも練習とは言つても、毎日決まったことを繰り返すだけの単純なもの。

ただ、ひたすらに“魔法を展開する”つてだけの本当に単純な作業。

魔法行使の際には、術式を構成した上で、よつやく発動する事が出来る。

術式の構成時間を限りなくゼロにする」として、使おつと判断してから、実際に魔法を展開時間までの時間差を解消しよつてのが目的なわけだ。

それこそ、身体で覚えるくらいに繰り返せば良いんだ。

そしてその短縮技術を用いた魔法展開の事を、瞬時展開と言つ。

ミッドチルダ式やベルカ式なんて、種類に違いはあるが、それはプログラミングで言う言語の違いのようなものだ。

その言語を組立てたものが術式だ。

だから同じような効果を得るための魔法であつても、両者で術式は異なる。

最近は大雑把にミッドチルダ式、ベルカ式の事自体を術式と呼んで区別することも往々にしてあるようだが……

魔法の瞬時展開 자체は一応、高等スキルに分類されてしまっているが、それ 자체をデバイスに任せても差し支えがない。

最近のデバイスはアホみたいに拡張容量があるからな。
数個の魔法程度なら術者 つまり、持ち主の合図一つで、瞬時展開と同等の効果が得られる。

拡張容量つてのは、デバイスに設けられた通常運用外の記憶容量のことで、PCで言つところの外付けハードディスクみたいなものだ。
専用デバイス持ちなんてのは、魔導師全体の中でも少ない。
オーダーメイドで作られる、専用デバイスは非常に高価な品だ。
どの魔導師も持つてはいるわけではない。

この世界では、専用デバイスを持つ事が魔導師達にとっての憧れでもある。

その点を鑑みれば、優秀な相棒を持った俺は、かなり恵まれている方だろう。

普通の魔導師は汎用型デバイスを扱うのだが、これらのデバイス使用者は、拡張容量を用いて各魔導師の個性に合わせている。

そして、状況判断を行える人工知能を搭載したインテリジェント型デバイスならば、使用者の危機的状況に反応して、デバイスの判断で防御魔法を使つたり出来る。

一昔前は、デバイスが使用者に合わせるんじゃなくて、使用者がデバイスに合わせるのが主流だつただけに技術の進歩を感じるなあ……

とはいって、俺のデバイスの拡張容量には充分な余裕がある。
魔法の瞬時展開をデバイスの媒介なしに行うための鍛錬するのは、
理由がきちんとあるんだが……まあ、出来れば理由は聞かないで頂
きたい。

モノローグで長々と語つて居る間に、公共魔法練習場に到着してしまったではないか。

「セセ、はじめるか つて先約が居るのか」

金髪と栗色のサイドテールお姉さんコンビ。

にしても、あの栗色サイドセンセビックで見たことがあるような気がするんだが……？

この練習場に来てるって事は、街中ですれ違っていても不思議じゃないしなあ。

あまり、注視していると失礼なので、充分に距離を空けてから練習を開始することにしておいた。

「んじゃあ、今日も宜しく

竜驥虎視

つちゅうじゅく

汎用型ではなく、先行試作機のデバイス。パーツ自体も規格外のものが多いので定期メンテが非常に面倒なのが。

汎用タイプなら、パーツが一般流通してるから、自分で整備したりできるんだが……この竜驥虎視に限って言えば、一般流通しているパーツの方が少ないという代物である。製作サイド的には、技術のブラックボックス化のためだとか言い逃れしていたが……

第5世代型デバイスの先駆けとして開発したらしいのだが、どうにもコレは失敗作というか、量産には不向きらしい。

あそここの研究所も人手不足だしなあ。

局のお膝元で研究開発してるわけだから、当然色々制約が付くしな。

第5世代型が一般普及し出すまで5年つてどこか?いや……他の研究機関もあるわけだから、競争もあって、もつちよい早くなるかもな。

それ以外にも、早急に作らざるを得ない状況になつたりとかで、早まる可能性もある。

例えば、大きな犯罪だつたりとかだけど……

無い事を切に願つよ…… 本当に。

モノローグ長いですよ。それと、私は第4・5世代型ですからね
竜驥虎視が悠長に喋り出す。
研究所の人のお嬢様らしいが、美少女ボイス アニメ声といつやつ
だ。

「その甲高い声は止めもらえないだらうか?」

無理ですね。中の人はプロの声優さんですよ。声をサンプリング
したのですが、いかんせん機械ですので応用がききません

「中の人なんていないんだよ……」

主は小さじ頃、着ぐるみの中からおひそかんが出てきてショックを
受けたクチですか?

「俺は世界の厳しさを垣間見たね。今思返すと、戦隊ヒーローモ
ノでピンクのお姉さんが戦闘シーンで明らかに太つてたりするよ
ね」

そうですね。せめて女性のスタントを使って頂きたいです

「……とにかく、リョウコさんや」

はい?

リョウコといつのは竜驥虎視の愛称である。

“リョウジョウコシ”だけでなく“リョウジョウコシ”とも読むらしいので、そこから適当にとつてリョウコシだ。
俺の名前が涼で、こいつがリョウコシのは若干被つてゐる気がしなくもないが。

「そろそろ練習をしたいんだけど……」

ビッグ、アリ田舎に

「分かった。おかしなところがあつたら言えよ?」

ええ、勿論

数個の小石を掴んで、高々と放り投げる。

暫く経過したところで、もう一掴みを放り投げる。

円周率の小数点以下第3位の数値と第10位の値を足して、2で割った数値は?

えーと、3・1415926589……だから

「5」

答えると同時に、ミッドチルダ式魔法の初歩の初歩であるリウンドシールドを上空へ向けて瞬時展開。

当然、落ちてくる小石はその効果により、俺に直撃することではなく、そのシールドによって弾かれる。
すぐさま、魔法を解除。

コツン、と小石が地面に落ちる音がした。

ネイピア数の小数点以下第2位から、第4位まで足し合わせた数は？

何で、こう超超越数ばかり出すんだよッ？！
もつとい、時事問題とか色々あるだろ？が……ー！

えーと

気を抜く暇もなく、再び出題される問題。
とある技能を身に着けるための訓練なのだが、一向に進歩の兆しが
見えないのが、気がかりではある。

「9？」

自信がないので、控えめに答える。
同時に、再びシールドを展開したのが

「……」

何かが頭に当たったような感覚。

そして、コツンと地面に何かが当たる音。

一応、私がある程度威力を落としておきましたけど……？

「だらうね。そこまで痛くない」

リョウコが勝手に判断して防御してくれたらしい。

これが先程軽く触れていた、デバイスによる擬似的な瞬時展開つて
ヤツだ。

俺はこれを、擬似・瞬時展開なんて風に呼称している。

それに、答えも違つてますし。正しい解答は1-1です

「勘だつたんだよ……」

そもそも、この鍛練方法が正しいのかすら分かりませんよ

「それは言わない約束だ。気休めでも、やることに意義があるんだよ。努力して結果が出ないのなら、泣き事言つても許されるしさ」

単位取得にその言い訳が通用しないと思いますが

「俺はまだ中等科だから単位制じやないんだよ。まあ、成績悪けりや補習はあるが」

それは知っていますよ。去年の実技科目補習を3つほど受けてたじゃないですか

「…………」

実技科目は魔法関連のもので、基礎的な魔法を練習するものである。一年くらいまでは、俺の得意とする魔力消費の少ないものが中心だつたわけだが……去年に入つて射撃、放出系が入つて來たので、魔力枯渇でぶつ倒れることが多くなつた。

大体、思考しながらの瞬時展開なんて、局のエースクラスでもなければ無理ですよ

「展開自体は問題ないんだが、術式構成と別の思考の並行はやつぱ無理か?」

一度二つ以上の問題の答えを導き出すようなモノですよ

ポリポリと頭をかく。

かれこれ2カ月程この練習を繰り返しているが、一向に成功する気配はない。

「座標指定なしの広域展開が楽に出来るなら、これも可能だと思つたんだがなあ」

普通は腕を伸ばすなどして座標位置指定を省こちやつてたりしますもんね

「一対多を想定した場合だと、両手塞がつた状態で攻撃される可能性も十一分にあるから、必要だと思つたんだが」

そうこうのは、一対一でまともに戦えるようになつてからやるべきかと

「手厳しいなあ。いや、この場合は口厳しいとでも言つべきか……？」

上手に事言えませんよ

「分かつてゐよ、そんな事は。でも、マルチタスクはエースクラスの魔導師なら会得しているらしいし……」

術式構成には頭を使う。

問題を解くのにも頭を使う。

このよつて、複数の思考行動・魔法処理を並列で行う事でマルチタ

スクを会得しようと言うのが俺の魂胆だ。

俺は、マルチタスクは魔法の展開高速化において、欠かす事の出来ない要素であると考えている。

複数の術式を同時に組める主なら、充分にマルチタスクを習得していると言つても良いと思いますが……瞬時展開を思考と切り離しての展開は、マルチタスクじゃなくて、単に反射の問題になつて来ていると思いますが

「え、 そうなの？」

主は器用貪いと言いますか……魔力量さえあれば、優秀な魔導師だつたでしょ？」

「そういうのは何度も考えた事があるけど、結局魔力量が多かつたら今ほど努力なんてしてないと思つよ」

「そうでしょうか？」

「それに、俺が同時に複数の術式を組めたりするのは、扱う魔法自体のレベルが低い事が要因だろう。だから一般の魔導師さんのマルチタスクと同列で語っちゃいけないんだよ……」

……

待機状態の竜驥虎視が光を放つていてる。

成る程……

ゆっくりと首元に手を伸ばし、一呼吸置いた後に振り向いた。

リョウウの無言と先程の光は、警戒を促すもの。この場合、恐らく背後に誰かいる筈

「 ッ!!

振り返ると、近くのベンチから先程のサイドテールお姉さんがこちらを見ていた。

表情自体は笑顔そのものだが、どうにもその……観察されてるというか、值踏みされているというか、そんな類の視線を感じる。

目が合ひ。

「…………」んばんは

取り合えず挨拶。

「こんばんは」

夜風に金色の髪が靡く 何とも絵になる光景だ。

だが、妙な違和感がある。

「…………」

しかしじつしたものか。

初対面の、しかも年上相手だぞ……？

「えつと、その……今日図書館で会いましたよね？」

図書館？

俺が図書館で会った人物は10人もいないし。そもそもこんな年上の人なんて……

あれ……？

彼女の傍には白い物体がふわふわと浮かんでいる。

あれは 兎？

つて、兎い……？！

つ、疲れてるのかな……練習のしそぎか？

目を「じご」と擦つてからもう一度見る。

相変わらず、兎のぬいぐるみがふわふわと宙を舞つている。

わあー、すつごいふあんたじい（棒読み）

魔力を食らつて勝手に念話なんぞすんじゃねえ……

魔力が勿体無いので、念話による抗議も出来ない。取り合えず、抗議代わりに待機状態の竜驥虎視をデコピンしておく。

第5世代型なんだから、その機能使って念話すれば良いものを……

にしても　さつきの違和感……魔力か？

ふと、彼女から魔力が微かに漏れ出しているのを感じ取った。

片目を閉じて、その根幹を盗み見る。

虹色に輝く光と、幾つもの光の筋。

魔力光が虹色……ってどつかで見たことがあるような？
それに付け加え、この感じは

「　変身魔法？」

「……あつークリス、変身解除！」

モードリリース

そう告げると、彼女が眩い光に包まれる。

一瞬何か見てはいけないモノを見た気がしなくもないが、きっと口に出すべきではないのだろう。

光が收まると、そこには毎間に見かけた少女の姿があつた。

「よく図書館で見かける子か！」

「はい。でも何で、変身魔法だつて……？」

「感知は得意分野だからな」

年上でもないので敬語を止めることにした。

「凄いですね」

厳密に言つと、ある能力の副産物なんだけれど。
あんまり言つたらすると口クなことにならないといつとまゝ、よお一
く知つててるので、一応は隠しててる。

「白川紹介がまだでしたね。高町、ヴィヴィオ。St・ビルデ魔法学
院初等科4年生です」

「市ノ瀬涼、中等科1年だ」

俺が名乗ると、何かを思い出したような表情をする、高町。

ああ……俺が彼女の存在を知つててるよつて、彼女もまた俺の存在
を知つててるわけか。

学院内のトップクラスの才能を持つ人間と、学院内ワーストの人間。陰と陽、真逆の存在。

「互いに名前と噂は色々聞き及んでいるみたいだな」

「えっと……そうですね」

彼女は少し氣まずそうに笑つてから、頬を人差し指で搔く。そんな仕草も妙に可愛らしく感じるのが、美少女クオリティー。

「別に学院内最下位の成績を誇るんだから、馬鹿にしてもらつて構わないぞ。寧ろ下手に擁護される方が迷惑だ」

「そういうのじゃなくて、噂を聞く限りでは何にも努力していない上での結果かと思っていたので、意外というか……」

「努力しなくて最下位なら」ちらりとしても納得できるんだがなあ。努力した上での最下位はかなりへこむぞ」

互いにベンチに腰をおろす。

家族以外の人間と話すのは凄く久しぶりな気がする。

「そつちは、身体強化系の魔法練習か？そつちの兎さんは」

「わたしのデバイスで セイクリッド・ハート、愛称はクリスです。今日貰つたばかりなんですけどね」

「成る程な……魔力制御は上手だつたんじゃないか？」

彼女のデバイス 兎のぬいぐるみがえつへんと胸を張る。

どこかのデバイスなんかより可愛げがあつて良いなあ、と思いつつ頭を撫でてやる。

まあ、あくまで“はじめてにしては”というレベルだが。

現状では……とてもじゃないが、実戦導入はお勧めできない。色々穴はあるが、その辺りの問題は時間をかけて解決していくものだ。

下手に口を出してしまえば、彼女のスタイルが崩れてしまう可能性だつてある。

長い目で見るのが一番だつよ。

第5世代型デバイスの機能の特性から、魔力制御や魔力管理を、自身の魔力特性からは、魔力節約を気にしなくてはならない。そんな生活をずっと続けて来ただけに、ついつい辛口な評価を述べてしまつだつ……

「見てたんですか？」

確かにさつき“視た”から分かったわけなのだが……

彼女の“見た”とは言葉は同じでも意味合いがきつと違つだつ。

「まあ、な……」

「そちらは瞬時展開、ですよね？」

「そつ。ただし展開速度重視しちまつたから、防御力自体は本来より2割減つてとこだな」

「術式に手を加えてるんですか?！」

驚くほどものなのだらうか……？
いや、驚くほど愚かな行為だからか。

普通、術式 자체に手を加えることなんてないし……一般に浸透している魔法は、様々な改良を経て今の状態に落ち着いたので、限りなくベストに近い。

通称は術式改変という呼称で呼ばれることが多い。

俺のは術式改変というよりは壞変と言った方が近い。

改良というよりは、改悪でしかないのだから。

「本来の力を生かさずに、殺してるんだけどな。そういうや、さつきもう連れの人居なかつたっけ？」

辺りを見渡すが、俺たち以外に人影はない。

少々気がかりがあるとすれば、未だに続くこの独特の違和感 魔力の存在。

「本当だ……ママがいない？」

「オイ、待て。」

今凄い発言が飛び出しだぞ……

高町、ヴィヴィオの母親と言えば、かの有名な高町なのはさんではないだろうか？

それが先程まで、この空間に存在していたと？

俺と彼女以外の魔力が微かに探知できることも、どうでも良く感じるほどの衝撃の事実。

「はーすっげえ、テンション上がりてきたー！」

「かの有名な高町なのはさん」、適切な魔法訓練法でもじ教授して頂きたかったなあ……」

「ママのは結構厳しいですよー。」

「だらうね。噂は聞いてる

それから暫く、雑談を交わしつつ時計に目を向ける。

おおよそ、小学生がうるついて良い時間はとつと過ぎ去っている。
途中で切り上げるべきだったか……？
いや……だが、未だにどこの誰とも分からぬヤツが魔法を使して
るわけだし。

会話開始直後から例の違和感は未だに続いている。

最初は目の前の変身魔法のモノだけかと思ったのだが、彼女がそれを解除した今もその違和感がある……と言つ事は、原因はまた別に存在する筈。
魔法を使つてゐるのは間違いないんだが、具体的に何を使つて
いるかまでは掴めない。

アレを使うつては……気が引かる　と言つて、出来る限り使いたくない。

怖い、からな……

「相変わらず弱いよなあ、俺は……」

一重の意味で弱いんだ。

「よし」

勢こよけ、立ち上がる。

「？」

「そろそろ、帰つた方がいいだろ。この時間に女の子1人なんて褒められたもんじやないし」

「そこまで心配してもらわなくとも……」

「お前自身は心配なくとも、俺は心配なんだよ。まあ、一番心配しているのは母上だらうけど」

「そーです、かね？」

首を傾げる仕草もまた可愛らしさ。

「では、また学院で……！」

「あつ ちよつとー送つて……」

俺の言葉など耳には届かなかつたのか、パタパタと元氣よく駆け出して行つた。

あらあら、フラれちやいましたね

何故か嬉しそうな声でそんな事を言つ。

「びつやらそのよつだな リョウコ、この違和感は何だか分かるか?」

断続的に一定の魔力量の消費が感知で来たのなら、フィールド系か単なる監視じゃないですか?

「問題は距離だよな。俺の感知距離を超えている上に、あの子にも一切感付かせていない」

少なくとも200メートル以上は離れているわけですよね

「いーや、ちよつち集中して感知したから300以上だ。距離自体も曖昧だけど……それに、こちらが本格的に感知距離を伸ばそうとしたら、違和感が消えた つまり、魔法使用を中断させたって事だ……こちらが何をしているのかも、丸々お見通しというわけらしい

化物ですねえ

「実力的なものを鑑みると、考えられる人物は

」

成程、彼女なら、余裕でしうる

「ちょっと戯れが過ぎますよ、教導官殿

溜息混じて呟いた。

自身の得意分野ですから、届かなかつた

それでも妙に清々しい気分だった。

「ヴィヴィオー

「あ、なのなママー。ビービー行つたの?

「お邪魔かなーと思つて。マタタリ先にボーラーフレンジを作らんなん
て、生意氣だぞー

「へ、そーこうのじかなこつてみ。ママこまコーカさんがいるでし
よー」

「ゴーノ君がそういうのじゃないから」

「うわ……顔色一つ変えずに言つたよ。ゴーノさんも可哀想に」

「んー？ 何か言つた？」

「ううん、何にも。それよりずっと見てたつてこと」

「ちょっと遠くから娘の成長を見守つたの」

「それは一般的には監視と云つたのでせ？」

「でも彼凄いね。」の距離からでも気付いてたみたいだし

「練習場からすこい離れてるのに？」

「距離としては340メートルだね。探知魔法も使わずに、そこまで感知できるなんて正規局員でも見たことないよ。あの様子からすると、まだ隠し玉がありそうだけど……」

「感知スキルかー、今度コツでも教わるつかなあ」

「こんな一幕もあつたり、なかつたり。」

第2話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は前回（消去前）より + 2 · 30 KB。

手直しする箇所は 1 話目より少なめ（？）でした。

マルチタスク云々の項目を追加しました。消去前はあくまで“展開速度”のための訓練でしたが、今回は“マルチタスク習得”的な訓練に変更。結果として、同じような目的になるのですが……複数の思考を並列して行えるなんて、人間技じゃない気がしますが。必須事項っぽいので、一応練習してもらう事にしました。

3 話も現在加筆修正中ですので、長い目で見守つて下さると嬉しいです。

ではでは

「ふわ……」

お世辞にも上品とは言えないほどの大きな欠伸。

退屈な授業を一通り終えてから、帰宅の準備をはじめた。

退屈な などと表現すると、まるで俺の授業態度が不真面目かのように思われるかもしれないが、そんな事はない。

座学に関しては一応の知識は持っているつもりなので、退屈と感じるだけだ。

卓上には先程配られた、小テストの答案用紙。67点という実に微妙な点数である。

可もなく不可もなく まあ、いつも通りだ。

「67点かあー、平均点よりちょっと低いくらい?」

不意に背後から声がしたので、思わず身体が反応してしまった。

「嫌だなあー、そんなに身構えなくても

右手で待機状態の竜驥虎視にそっと触れ、左手で胸ポケットのそれを掴んでいた。

リョウウの待機状態はシルバードッグタグ。

元々は軍隊における兵士の個人識別用に用いられていたものだ。刻み込まれているのは、アルファベットと数字の羅列 と、かなり小さく跳ね馬の印がある。

型番、アセンブリ設計完了日時、初起動時の日時、開発責任者の名前、研究施設の名称。

印に関しては、製作者さんの証、落款のようないし。

「いや……背後から急に声をかけられたら、普通身構えますよ
シスター・エリーゼ」

俺の通うJ・ヒル・魔法学院は聖王教会お膝元の施設のため、シスターさんが多く在籍している。

彼女、シスター・エリーゼもその中の1人である。
机の上に行儀悪く座り込み、腰まで届くほど赤髪を指で遊びながら、悪戯な笑みを浮かべつづけた。

「その手に持ったボールペンは、どうするつもりだったのかしらねえ。思いつきり先端をこちらに向けてるし……」

左手に握られていた万年筆を指して、シスター・エリーゼがそう言った。

これは爺ちゃんが1-2歳くらいの頃、元服祝いだとか言つて、渡してくれたものである。

不器用なのが、こういう面を見ると、つぐづぐ「父さんとは似ても似つかないなあ」、なんて風に思つてしまつ。

「ペンは剣よりも強し、なんて言葉もありますし」

「涼君は背後から声をかけた人間に対して、こんな真似をするのかなあ……？」

「俺の背後に立たないで下さい」

「それ、ビートのスナイパー…………それ」「リョウサウayanを利毛手である右手に添えてる時既で、ペンヨウツ剣を取つているじゃない」

「むう…………よく見でますね

「氣になる野の子ですもの」

「やつやあ、ビートも

「そつけないわね。年上のお姉さんは嫌い?」

「嫌いじゃないですけれど…………」

「それは良かつた。じゃあ、もつ少し面白いカンケーになつてみる?」

ずいつと、彼女の顔が眼前にやつて来る。

距離にして僅か5センチほど。

何かの弾みでぶつかつてしまいそうな程の距離。

だけど、まず出てきた感想が色氣のあるようなものではなかつた。目の下のクマに気付いたのだ。

化粧で少しほ隱してゐるのだろうが、この距離ならば容易に見破れる。

視界には彼女の灰緑色の瞳。

クマの色は青つぽい」と言つ事は、夜更かしが原因か……?

クマの色である程度原因が特定できるらしいのだが、果たして俺の見立てはあつていいのだろうか？

だが、彼女の体調不良にしる、寝不足にしる、恐らく原因は仕事か……あるいは、単に新作のゲームでも徹夜でやっていたのか……

少し心配になつたので、さり気なく仕事の話題を振つてみる事にした。

「それより、学院の仕事はどうでしたんですか？」

「私は雑用係だからねえ。そこまで忙しくはないわけよん」

その語尾はどうかと思うが、少なくとも学院内の仕事が原因ではないらしい。

となると、原因は……教会の方の仕事か？

「雑用……」

「掃除とかがメインかな」

「そういえば、教会では何をしてるんです？」

「普段は介護施設の訪問みたいなボランティア活動がメインなんだけど、最近は別件で動かなくちゃいけなくてね」

「別件とはいつと……？」

妙に意味深な台詞に聞こえたので、尋ねてみる。
恐らくこれが、寝不足の原因なのだろう。

「最近、とある傷害事件があつてね。それの警戒のために夜出張つてゐるのよ」

「傷害事件ですか。物騒ですね」

「格闘戦技の実力者ばかりを狙つた犯行で、自称“霸王”イングヴァルト。実力はかなりのもので、前線部隊の魔導師も何人かやられてるのよ」

「イングヴァルトっていうと、ベルカの王ですよね」

クラウス・G・S・イングヴァルト、別名“シユトウラの霸王”ベルカ戦乱期の王の一人。

ベルカの王っていうと他に有名どころは 聖王オリヴィエ・ゼゲブレヒトだな。

「しかし、自ら“霸王”を名乗る、か……」

「目的もよく分かんないし」

お手上げ状態と、両腕を軽く挙げて「困つた」と呟くシスター・ヒリーゼ。

「あれ、目的は明確じやないですか

「ほえ？」

素つ頬狂な声を上げるシスター・エリーゼを尻目に、自身の考えを語

る。

「格闘戦技の実力者の田の前で“霸王”を名乗るわけですよ。挑発じゃないんですか？ さしづめ、自分の力試しと言つたところでどうか？」

「おおー。」

納得行つたのか、「うんうん」と頷く。

まあ、あつと彼女の上司さんはその事実に気付いているんだうけど。

しかし、表向きの報道はない事件だよな。

隠そうとしていることは、あんまり手がかりがないってことか。明らかに前線不向きな能力のシスター・エリーゼにまで警戒の仕事がまわってきているという点を考慮すると、尻に火が付いた状態なのだろうか？

加えて、局員がやられたつて言つ情報を表向きにしたくないと言つ、局意向もあるか。

確かに……局の信頼を守るために、局員が通り魔にやられましたなんて言いたくはないよな……

それに、犯人が“霸王”と名乗つている以上、熱狂的な聖王教信者の疑いもある つまり、教会に批難の矛先が向けられる可能性もある。

これらの点を鑑みて、表沙汰にしない方が良いつて結論に至つたのだろう。

推測の域を出ないんだが……それ以前に、一般人の俺が聞いても差

し支えないのだろうか？

まあ、この際どうでも良いか。

「シスターも気を付けて下さいよ」

「安心なさい。力はないけど、ひ弱ではないから

ウインクして見せる。

いや……魅せるつてのが、おあつらえ向きな表現かもしねない。

「それに、わざわざクマの事に気付いて、事情を直接聞かない
ように遠まわしに話してたじやない。そういう気遣い、お姉さんは
大好きよ」

「む……」

やはり気付かれていたか……喰えない人だ。

もしかしたら、遊ばれただけなのかもしけんな……

ちなみに、彼女は結界魔導師。

相手を拘束することに関してはトップクラスの腕前だが、単独任務
には向かない能力もある。

ツーマンセル前提としての魔法が多い。

結界魔法は座標指定なんかがかなり面倒で、術式を組むのにかなり
の時間が必要となるのだ。

「心配してくれるなら、私のピンチには主人公の如く駆け付けてく

れると嬉しいわね」

「俺は主人公なんて性質じゃないんですけどね。それでも、恩人の窮地くらいは救いたいと思つてますよ」

「冗談だつたんだけどなあ」「あ

「俺も冗談ですよ」

「酷ヅー。」

「冗談言える上に、そんなテンションなら、心配なさそうですね。少し安心しました。シスターに体調でも崩されたら困ります」

「ほほう、困るのー？」

「ええ、そりゃあもう。学院内で唯一気兼ねなく話せる人ですから」

自分自身の皮肉に思わず苦笑いになってしまった。

「やつぱり
ね

「？」

シスターが何かを呟いたらしいが、残念ながら俺の耳元には届かなかつた。

「なあーんでもない。それじゃあ、私は夜回りのための準備でもしますかな。後、涼君。手を抜くのも程々にしておきなよ」

手元の答案用紙を指でピシッと弾いて、机の上からぴょんと降り立つて、掛け足で去つて行った。

「まつたく……元気な人だ」

そこが彼女の魅力でもある。

色々と見抜かれているようだし、敵には回したくないタイプだ。

「さて、どうするかな」

教科書やらノートやらを詰め込んだバッグを片手に、今田これからの行動について少し考えてみる。

ふと、昨日の高町の「では、また学院で……」といつも台詞が脳裏によぎつた。

「また学院で、か……」

気が付けば、歩みを図書館に向けていた。

下心がないわけではないが……慕ってくれる後輩と云ひのな、どうにも可愛らしく感じてしまふものなのだ。

図書館は相変わらず閑古鳥が鳴いてる。

活字離れとは本当らしい。

最近は何でも電子化されているし、調べ物に関してもある一定のレベルであればネットワーク検索でどうとでもなるしな。

図書館に足を踏み入れると、独特的の静けさと、ひんやりとした空気を感じ取れた。

蔵書の状態を維持するために、少し低めに設定されている室温。軽く深呼吸をすると、古書特有の香りと新鮮な空気が肺一杯に広がる。

「さて……」

視線を彼女の指定席である、窓側の席に視線を向ける。そこにはいつも3人組が、楽しげに談笑していた。

邪魔したら悪いな、と思い踵を返そうとしたところで

「あ、市ノ瀬さん！」

ぶんぶんと大きく手を振る高町。

俺は諦めたよつて、肩を脱力させてから彼女たちの座る席へと向かつた。

途中、本棚に新書があつたので適当に何冊か見繕つ。

「昨日ぶりだな」

「はい。市ノ瀬さんに会つたためにこじで待つてたんですよ

よく恥ずかしげもなくそんな台詞が言えるなあ……べ、別に照れてねえぞ？！

「できれば、彼女たちを紹介してくれると嬉しいのだが」
視線を彼女の連れに向ける。

「えっと、わたしはコロナ・ティミルです、

ツインテールで妙に気品がある。
続けて、隣に座っていた八重歯でショートヘアの子が自己紹介し始めた。

「リオ・ウェズリーです」

「中等科1年、市ノ瀬涼だ。ちなみに、想像通りの人物だ」

近くの席に腰を下ろしてから、そう告げた。

彼女達の視線は大凡、初対面の人間に向けるものではなかった。
どこか警戒しているような、そんな視線。

警戒される覚えは……残念ながらあるわけで。

学院内の問題児なのだから、彼女達の視線も仕方ないだろう。

「昨日、ウチのママが見てるのに気が付いてたんですか？」

妙に興奮した様子で尋ねてくる、高町。

ウチのママって言つと、高町なのはさんのことだろ？。

「ああ、やつぱり。アレ、高町さんだったのか。感知範囲から判断して、300メートル以上は離れてたからな……エースオブエースは伊達じやないってことだな」

うんうん、と頷いて納得する様子を見せる。

まあ、望遠の魔法は砲撃魔導師にとつてなくてはならない存在だ。長距離砲の照準だけでなく、現場把握などにも用いられる。

サーチャーでやる場合もあるのだが、それは魔力消費量が大きい。魔力で作り上げた、遠隔操作が可能な力メラと言つたところか。

サーチャーは基本球体で、魔力光を放つてゐるため、相手に勘付かれる場合もある。

昨日のように暗がりでは、特に危険だ。

まあ、彼女クラスになるとサーチャーにステルス機能付けたり、サーチャー自体に望遠機能を備えていたりもしそうだが……

俺が勘付けただけでも、奇跡みたいなものだ。

今度是非お会いしたいものだ……サインも欲しいし、何より噂の集束砲撃魔法とやらをお目にかかりたい。

「すつじいー！」

「はい……？」

好奇心で目がキラキラさせている、高町。

これが野郎なら、ギラギラした目付きなのだろうが、美少女は何から何まで補正がかかって見えてしまつものらしい。

思わず目を反らしてしまつぐら¹に、可愛かった。

「どうして分かつたんですか？！エリアサーチしていいた様子もありませんでしたし」

「それは、その 企業秘密だな。唯一の特技を他人に教えるつてのは、存在意義を奪われるのと同義なんだよ」

特に俺のは初見の相手にくらいしか、十全に能力を發揮出来ない。それに説明しようにも、こんな能力信じてもらえないだろう。中々に難儀なものなのだ。

「うー、市ノ瀬さんの意地悪う」

や、やめてくれ。その上遣い。
心が揺らぐから、勘弁してくれないだろうか……

だが、こちらとしても切り札は伏せておきたいのだ。
もつとも、使う機会がないってのが一番なのだが。

「市ノ瀬、せんでしたよね……？」

ツインテールの子が申し訳なさそうな表情で尋ねた。
怯えも含まれているのかも。

「ああ」

「本当にあの“市ノ瀬涼”なんですね？」

「やっぱ、問題児とは一緒に居たくないくて事か？」

皮肉交じりに言つてみるが、年下の子に少し意地悪だったかもしないと心の中で反省。
以後気を付けるとしよう。

1人でいることの方が多いから、他人と接するといふこと自体で一杯一杯なんだよ。

「いえ、その……聞いていた印象と全然違うから」

「高町もそんなこと言つてたな。別に成績が悪いだけで不良ってわけじゃないぞ。努力した上での最下位だからなお性質が悪いとも言えるが」

「その……『めんなれ』」

いきなり頭を下げられた。
なんだ、この背徳感は……？

「えつと、俺が何か……？」

「ヴィヴィオが市ノ瀬さんと会つて良い人で、また会いたいって言つてたから……」

もじもじと、制服の裾をひっぱたり握つた込んだりしている。
この小動物的な仕草は……悪くない。うん。

「先輩の噂を聞いてたから、止めといた方が良いつて言つちやつたのー！」

彼女の脇にいた、短髪八重歯ちゃんが声を張り上げた。

「なんだ、そんなことか。別に黙つてりや済む話だろ？」

「でも……」

「火のないところには煙は立たないって言つだろ？ 実際俺が善か悪つて言えば後者だし。友人のためにそう言えるお前らは凄い。誇つていいぞ。ちなみに、暗に俺に友人がいないことを表現しているわ

けではないからなー!?」

「良いんですか?」

「そうですよ、だつて先輩のことを噂だけで勝手に悪い人つて思つて」

「んー、その辺は価値観の違いじゃないか?第三者の評価なんて俺にはどうでも良いことだし。まあ、納得できないなら俺が器の大きいお兄さんだとでも思つことだ」

「器の」

「大きな」

「お兄さん?」

3人が呟いて、顔を合わせる。

「何だ、その笑いを堪えたような表情は?!」

俺がそう叫んだ直後、笑い出す3人娘。

その反応は流石にショックだぞ……

「全ぐ、急に笑い出すから何かと思つたじゃないか」

「すみません」

「あの短髪八重歯ちゃん、田がまだ笑つてやがるわ。高町、何とかしてくれ……」

「わたしのことはウイヴィオで良いですよ」

「はい?」

「名前です」

「んな」とは、分かつてゐる…………

会つて2田田の男に名前で呼ぶ」とを許可する、だと……? いかんな、何かしらの罠か。

或いはこの出来事自体が夢の中の出来事 落ち、とこつづきもあり得る。

カメラかサーチャーでも仕掛けられているんじゃないかな?

「何、難しい表情してるんです。先輩?」

八重歯ちゃんがこちらの表情を窺うようにして尋ねてくる。ちなみに、先輩と呼ばれてけよつと嬉しかった。

「いや……」

疑つていたという行為自体が、彼女に失礼だよな。彼女の真つすぐな瞳を見て、思いを改める。

「ヴィヴィオ、これで良いな？」

確かめる呑みにむづくつとお前を呼ぶ。

「はい」

「元気な返事で大変よろしい。俺のことも市ノ瀬じゃなくて、涼でいいぞ。親しみを込めて、涼くんや涼ちゃん、或いはお兄ちゃんなんかの変化球でも良いぞ」

「では、涼さんで」

ちなみにお兄ちゃん呼称を微妙に期待していたのだが、それは今後のお楽しみとして取つておくとしよう。

「じゃあ、わたしの」とも口口ナリて呼んで下さい。涼さん

「じゃ、あたしの」とはリオで。お願いします。先輩

「お、おう……」

よく分からんが、年下の美少女3人とそれなりに仲良くなれたようだ。

俺が学院で最も出来の悪い人間で、変な噂が立つ男と知った上でわざわざ名前で呼び合つ関係を望むつてのは奇妙な話だな。

どれだけ彼女たちは心は寛容なのだろうか……保護者が知つたら注意するぞ、多分。

第3話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

日曜更新の予定でしたが、予定より早く修正が完了したので本日投稿しました。

今回は前回（消去前）より + 3 · 62 KB。

デバイスの待機状態に関しては適當。

クリスタル型だと、色とか形状とか色々と描写が面倒なん^{ry}時計とかにしたかったんですが、それだとエリオ君と被るので、男が身に着けていても問題ないようなものにしました。

ちょっと中二っぽい？

だって、主人公は年齢的には中一だからね！
裏設定があつたりしますが、それに関しては気付いた人だけのお楽しみ。

シスター エリーゼとの会話をかなり増量しました。

若干伏線が増えてる気がしなくもないですが、それに関してはその内回収していきます。

感想下さると嬉しいです。

ではでは

「へえ、じゃあみんなストライクアーツやつてるのか」

ストライクアーツっていうのはミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技の一種である。

広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称であり、護身やダイエット目的ではじめる人も多いという。

何よりストレス解消に持つてこいらしい。

打撃による格闘技術ね……俺は苦手だな。

基本的に非力だから、技を学んだところで、それを100パーセント生かせないんだよね。

それに、「打撃による徒手格闘技術」と謳い文句を掲げているものの、競技者の多くは魔法による身体強化を施している。

ルール上、特に問題もない。

打撃でダメージを与えれば何でもOK、みたいな緩さだつたと記憶している。

俺も強化は使えるが、魔力効率やら消費魔力の影響からか、一般的魔導師が使うものよりパフォーマンスは下がっている。

それに力技でダメージを与えるのではなく、基本汚い手で勝ちを取りに行くタイプの俺では敷居が高く感じてしまう。

ま、模擬戦にしろ実戦にしろ、勝つたことなどないのだけれど。

「明日練習あるんですね、一緒にどうですか？」

「んー、どうするかな……」

参考になるものが何があるかもしれない。

技を盗むとかは無理だろうけど、相手がストライクアーツ主体だった場合を想定すれば、ある程度動きを見ておいた方が良いだろう。

基本的な動作が幾つか存在する筈だ。

その動きの初動を見極めて次に相手が出していくであのいつ一撃を見抜く。

ありもしない実戦を想定しつつ、今回の件は良い機会だと思い込む。

ちなみに、美少女3人と休日デートできる…なんて邪な気持ち
は精々8割くらいしかない。

「まあ、見学だけなら」

その一言に喜ぶヴィヴィオの姿を見て、心中で嬉々としていた自分が妙に情けなく感じて……

俺は苦笑いしながら、ただ明日という日に期待感を抱いていた。

ああ、何と言つか……実に思春期の少年らしい煩悩だ。

翌日

ミッドチルダ中央市街地

「眠い……」

欠伸を噛み殺しつつ、待ち合わせ場所で待っていた。
約束の15分前だ。

実のところ、30分前から待つていたりする。

何だか、初デートではしゃいでるキャラみたいなことしてるな……

「寝むそづですね」

「ああ、口口ナカ。おはよづ」

ツインテールを翻しながら、口口ナが現われた。
フリルのあしらつてある純白のワンピース。

服装からも“清楚なお嬢様”の雰囲気が漂つ。

「夜更かしですか？」

「ちょっと、知り合いのシスターさんの尻拭いに行っていたんだ」

昨晩、シスター・エリーゼから「夜道の一人歩きは怖いから」と、数時間ずっと電話の相手していた。彼女には大きな貸しもあるので、俺は二つ返事で付き合つたわけだが……

よもや、明け方まで付き合わされるとほ。

それもただの雑談ではない。

深夜の巡回と言い張りつつ、公園でイチャイチャしてるカップルをずーっと観察してたり、野外での情緒などを映像を交えながら実況すると言つ暴挙までやつてのけた。

「ねえねえ、見た見た？！あんの若造、キスしよつたでえーーー！絶対入ってる！絶対舌入ってるってーーー！」

公園のベンチで口付けしていたカップルを、背後の木陰からサーチャーで激写しつつ、そんな事を叫んでいた。

口調がおかしい上に、鼻息が荒く、「夜道が怖い」と言う女性のものではなかつた。

あの人、本当にシスターなのだろうか……

「それより、私服も似合つてゐるな。すゞい可愛らしき」

あん?

何故に顔を真つ赤にして俯いているんだ?

「……どうかしたか?」

「い、いえ……」

「ここまで意識されるとは予想外。

まあ、異性として意識されているだけ喜ぶべきか。

年齢的には、まだ男女の垣根ないと踏んでいたのだが、最近の子供はおませさんなのかねえ。

主が一番ませているよつた気がしますが……

リョウウコのツツコミが聞こえた気がするが、きっと氣のせいだろ。俺の心の声など、聞こえる筈がないのだから。聞かれてたら色々とマズい。

主に思春期特有の歪んだ感情とか、邪な考え方とか……

「涼せんぱーい、コロナー、おはよーー！」

元気よく現れたのは、短髪で八重歯がチャームポイントのリオだ。ホットパンツからスラリと伸びた脚は実に健康的で、これまた彼女らしき私服であった。

やはり、服装には性格もある程度反映されるものなのだろうか？まあ、俺はファッションとかそんな類の知識は皆無なんだから、言い切れないんだけど。

今考えると、集合場所にジャージ姿と言つのは些少か難ありか？髪にしたって、寝癖をドライヤーで寝かしつけて来ただけとこいつもので、整髪剤などは一切使用していない。

「こりに無頓着なのは、女の子から嫌われる要因となるかもしないし、今後は少しばかりを使つべきか？」
いやいや、わざわざ意識すると「何コイツ、私の事を意識してんの？」なんて風に思われて、逆に距離を置かれるかもしれん……

「……」
と云ひか、何で俺はこんなに年下の娘に翻弄されてるんだよ……
自分で勝手に悩んで、勝手に翻弄されて……ホントに惨めと言つか。ある意味俺らしこいつちや、らしこいんだけどな。

「でも、少し悔しかつたりする。
だから、ちょっとだけ意地悪をしてみた。

「おはよつ。リボンえたのか？よく似合つてこるわ」

「あ、そりですか……よく気付きましたね」

「そりゃ気付くだろ」

「口口ナにも似たよいつなことやったんですね？」

「ん？ああ、服装が可愛らしいんで褒めたんだが」

「成る程、だからあんな顔真っ赤にして俯いてもじもじしてるわけだ……」

「なんだ、あの程度で照れるのか？男に免疫がなさすぎるのも考え方だ。将来変なのに引っかかるぞ」

ニヤリと嫌味っぽい笑みを向ける。

ちょっとした意地悪のつもりだったが、予想外に可愛らしい反応が見られた。

「先輩がそれを言いますか」

「俺が“変なの”と言いたいのか」

「直接的表現は避けてたんですが、言つて欲しかったんですか？」

「いーや。でも2人とも可愛いって思ったのは本当の事だよ」

爽やかな笑みを浮かべてそんな気障な台詞を吐いてみる。

柄じゃねえな……

自分で言つてて、ちょっと気持ち悪かった。

後ちょっと照れ臭かった。

「この言葉は本当に柄じゃない……」

「ここはー、ありがと。先輩」

リオは軽くいなしたが、コロナの方は黙つたまま、チラチラとこちらに視線を向けたり背けたりするといつ行動を繰り返していた。いやまあ、小動物みたいで見てる分には保養になるから良いんだが……

こんなに意識されるとは思わなんだ。

本当に免疫が無さすぎるのも考え方だと思つた。

加虐心が沸々と湧き上がつて来る。

加虐心と言つのは、少々大袈裟か……言い表すなら、犬の目の前に餌を置いて、“待て”をしてその様子を愉しむのと似たような感情と言つた。

うん、将来変なのに引っ掛からなこと、今の内にショック療法で耐性を付けておいてやう。

勘違ひしないで欲しい。

決して、自身の欲求を満たすためじゃないんだぞ？
彼女達のためなんだ。

よしつ！正当化完了ツ

！

「…………」

じーーっと、口口ナの方を注視する。

「…………」

視線を街を歩く人々に向け、髪の毛をやたらと気にしたり、情報端末を弄つたり、意地でもこちらと田舎を合わせないつもりらしい。

続いてリオの方に視線を移動させる。

「？」

田舎を合わせてから、可憐らしく首を傾げて見せた。
こうこう反応が普通だと思うが……まあ、両方可憐だから良しとしておこう。

どうして年下の娘って、いつにかけたくなつたりもんなんのかねえ？

単に俺の性癖と言つてしまえばそれまでなのだが、保護欲とかそういう類の感情なのだろうか。

「リオー、口口ナー、それに涼せーん。おまたせーー！」

階段からパタパタと走つて来る、ヴィヴィオ。

傍には彼女のデバイス ク里斯が寄り添つてゐる。

少々短めのスカートと、白いニーソックス。

その境界部分の肌が露出する箇所は、絶対領域とも呼ばれる。

ニーソックスとハイソックスを混同する人が多いようだが、前者は膝上、後者は膝下に届くものを言づ。

そして、ヴィヴィオの身に着けているような、太ももまで届くニーソックスの事は、オーバーニーソックスやサイハイソックスと呼称される。

と言つた、俺は何故こんなに一人についてモノローグで熱く語つてゐるんだ……？

女性を見るとき、大体足元から見てますから脚フェチなのでは……？うわ、気持ち悪い。私の脚とか注視しないで下さいね。訴えますよ、ミッドデバイス保護団体に

お前脚ないじゃん……

それに、何だよミッドデバイス保護団体つて。

動物保護団体ならあるが、そのデバイスバージョンか？

と言つた、何自然にモノローグにツッコんでるんだよ？！

の方々は彼女の知り合いでしょうかね？

ヴィヴィオの背後に居る、2人のお姉さんの事を指しているのだろう。

恐らく関係者なのだろうが……

そう思いつつも身体は正直なもので、反射的にリョウコへ手を伸ば

そうとしていた。

そして、そんな自分に少し嫌悪感を抱く。

「リオと涼さんは初対面だよね？」

「うん」

「ああ……」

先程の疑問はヴィヴィオの一言で吹き飛んだ。やはり、ヴィヴィオの知り合いらしい。

「はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりました。リオ・ウェズリーです！」

「元気良いな……何より、屈託ない笑みが眩しいよ、本当に。

「はじめまして。中等科1年市ノ瀬涼です……」

一方根暗で、引きつった笑顔の俺。

額から汗が噴き出すのが分かる気がする……

ついでに胃の辺りがキリキリと痛み出した気もある。

「ああ、ノーヴェ・ナカジマと」

「その妹のウホンティスス」

ナカジマっていうと、父さんの知り合いでそんな名前の人人が居たような気がするんだが……

「気のせいだらうか？」

「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私たちの先生なんですよ」

ヴィヴィオとコロナの師匠……つまり、彼女がストライクアーツの師匠ということか。

成る程、類は友を呼ぶ　　美人は美人を呼ぶんだな、なんてどうでもいいことを思いつつ言葉に耳を傾けていた。

「よつ！お師匠様！」

ウェンディさんはからかう様に悪戯な笑みを浮かべてそう言った。

「コロナ、先生じゃねえつづーの！」

ノーヴェさんは照れくさいのか、頬を微妙に赤くしていた。

まあ、悪い人達ではないようだ。

「先生だよねー？」

コロナの問いかけに

「教えてもらひつてるもん

「先生つて伺つてますー！」

ヴィヴィオとリオはハキハキと答えると、ノーグンさんがますます恥ずかしそうに頬を染めていた。

そんな様を見て思わず、頬が緩む。

「悪くないな」なんて事を思いつつ、田的地区へと足を進める。

中央第4区 公民館

公民館と聞くと廃れた場所というイメージがあるかもしれないが、この世界においては、それは全く別物である。様々な施設などがあり、地域住民たちの憩いの場となっている。

しかし……ストライクアーツの練習場が公民館にあるほど、需要があるんだな。

少しばかり過小評価していたというか、ぶっちゃけ馬鹿にしていたが……素直に考えを改めるとじょう。

壁に背中を預けて、利用者たちが身体を動かしている姿を眺める。

ヴィヴィオたちは運動用の衣類に着替えている。

女の子は運動着で外に出歩きたくはないよな……まあ、俺は最初からジャージなんだが。

「基本的な形にはなつてゐるみたいで、たまーに無理な体勢から拳や蹴りを出したたりするんで、反射的にごく僅かですが魔力を使

「どうこういつ」とつスか?」

先程から一瞬、ほんの僅かだが瞬間的に魔力を感知できたのだ。

「気付いたのか……」

「それよりアレ、本来は魔法使わない練習ですよね?」

「お前までからかうのか……」

「手厳しいですね、師匠さんは

ハーヴィさんが腕組みしながらそつ唇く。

「形にはなつてるが、まだまだだな

目の前で型の練習なのかすら知らないが、身体を動かしていの姿を見て思わずそんな台詞が漏れ出した。

「えらくサマになつてゐるなあ

つて補助してますよね？」

本人達にもきっと自覚がないくらいのレベルの些細な魔力量。魔力量の多い人間は、稀に無意識で魔力を放出してしまうことがある。

寝ているときとか、感情が不安定になつたときなど様々だが、それの一種なのではないだろうか。

変換資質持ちとかだと特に大変らしいな。

電気持ちなら感電、停電に、家電全滅。

炎持ちなら火傷、火事。

年に何件かはこう言うのが原因で怪我人が出たりしている。まあ、こういう人は総じて強力な魔導師になるからな。

局としては指導を行いつつ、同時に勧誘もしていたりもする。

「もしかして、何か心得もあるのか？」

「まあ、少し齧つた程度です。文句言つだけで、自分自身の実力なんて底の知れたものですが」

勿論それは真実で、精々何年か父や祖父に教わつただけのお遊戯と言つても差し支えのない程だ。

「ですが、修正するなら早めの方が良いですよ」

無理な体勢から強力な一撃を叩きこむつてのは、身体にかなりの不可がかかる。

特に成長期の子供にはかなり危険だつたりするから、魔力である程

度不可が軽減されるとほいえ、見過^{ハシメテ}して良いものではないだろ？

ノーヴェさんも重々承知の上だろうが、ヴィヴィオ達のことを考え
て一応釘を刺しておいた。

「これでもまともになつた方なんだよ。アイツ等馬鹿みてえに魔力
量保有してゐるから、無意識みたいなんだ」

「でしょ？ 俺の何千倍あるんだか……」

「ありや、そんなに魔力量少ないんスか？」

「リョウウゴ、例のアレ出してくれ」

ジャージ姿では似合わない待機状態のリョウウゴに軽く指を触れる。

了解です

表示したパネルをノーヴェさんとウェンティさんに見せる。
つい先日受けた、魔力総量診断結果だ。

「…………」

「何桁が足りなくないスか？」

「…………」

「あのー、桁が……」

「ウーンティ、それ以上ヤツの傷に塩を塗るのは止めてやれ

「どうせ、俺は魔力量ほゞ皆無ですよーだ」

地べたに座り込んで、床に「の」の字をひたすら書き続ける。ショックだ。

分かつてはいても、他人から真正面から言われるのにはキツイものがある。

「柘が違うつて言われたよ、リョウコ」

はいはい、泣かないでください

「泣いてなんか……ねえよ！」

いや、ホントに泣き始めるの止め下さい。マジで対応に困りますよ

「だつて、柘が違うつて言われたんだよお？」

思春期男子の心をバツサリですね。単に折ったんじゃなくて、根本から折りやがりましたよね

「悔しくなんかないんだからねッ！…」

「でも、この魔力量つてことは精密魔力探知なんて出来ないはずつスよね？」

ウヨンティさんが不思議そぞろ言つた。

「アレは感覚による感知なんで、魔力消費自体はゼロですよ。距離

が近いんで、それほど苦労しませんでしたが

「僅かな魔力によく気付いたな

「俺は魔力にちょいとばかり敏感な体质なもんで。身体が魔力を違和感として察知するんですよ」

「難儀な体质つスよね？それって」

「でも、これのお陰で色々助けられる事もあるので……それにあの娘達と会えたのも、この体质あってこそですから。悪い事ばかりでもないですよ」

視線をヴィヴィオたちに向ける。

「良い奴そうで安心したよ」

「あれ、俺つて警戒されてたんですか？」

「そりやあな。あの娘達より年上のしかも男で、こいつ思いつきり警戒してたじやねえか」

「警戒なんかしてましたっけ」

「首元のそれ、デバイスだ。あたし等確認した瞬間、手を伸ばそ

うとしてたろ？」

「あー、やっぱバレてしましましたか」

隠し切れるとは思っていないし、そもそも警戒していると言つて、意

思”を伝える事で牽制効果もあると踏んでいたが。

かなり効果的だつたらしい。

効果があり過ぎて、相手からも牽制される事になってしまったわけだが……

よくよく考えてみると、あんな街中で身構えなければならぬいような事件が起ころる可能性なんて、かなり低いだろうに。浅墓だな、ホントに……

「インテリジョン型か？」

「一応はそうなんでしょうが。父さんが譲り受けた試作機なんですが」

亡くなつた父が、さる研究機関の技術者さんからタダで頂いたもの。曰く第4・5世代型であるらしいそれは、現行機より遙かに扱いにくい代物である。

一応第5世代型に設置予定だつた機能は備わつてはいるが……

「へえ、そういう機関の試作機つて表には出さないもんじゃないのか？」

「第5世代型のための試作機つて名田で開発されたんですが、開発コンセプト自体がお釈迦になつちやつたみたいですよ」

「現行機はたしか第4世代だろ？お釈迦になつたって……それつてつまり欠陥機つてことじやないのか？」

「だからタダで譲つてくれたんでしょう。向こうだつてある程度負い目があるから、定期メンテまでやつてくれてるんでしょうね」

「アフターケアまでずっとつとめていたから、ここへ来て顶くのが、何とか

「モノは考えよつぐな

苦笑しながら、ノーブルを元回意する。

「ヒルディ、涼ちゃん

「その妙な呼び方を許可した覚えはありませんよ、ウーンティたん

「といふで、あの中の誰とテキてるんスか?」

「」のお姉さんスルーした揚句、何を言つてこらのへーー。

俺の叫びが公民館内に響き渡った。

第4話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

今回は前回（消去前）より + 4 · 84 KB。

主人公の性格の悪さが、若干以前よりも増しているような気がしなくもない……

今回は回想で、シスターの出番がちょっと増えてたり、リョウウコとの会話を追加したり、色々ですね。

三人娘が可愛く書けていれば良いのですが……

若干コロナさん成分が多かつたかな?

私的にはコロナさんとアインハルトさんは耳年増キャラだと思つてます。

えつちい単語とかを聞いて、一人がポカーン、二人が赤面 こんな状況を妄想していたりするのは、きっと私だけ。

感想下さると嬉しいです。

ではでは

「んじゃあ、誰ともテキてないんスか?」

さも付き合っているのが当然のように尋ねて来るウコンティさん。

「そんなわけないでじゅう!」

「つまんないっスねー」

「年下の男をからかって楽しいんですか?」

「樂しいっス! 何か興奮しまスよね、ノーグエ?」

「しねえっつーの!」

ウコンティさんは俺の疑問に対し若干頬を赤らて答えてから、ノーグエさんに同意を求めるが、同意は得られなかつたらしい。年下をからかつて楽しむのは、何も俺だけではないようだ。

「も、弄ばれた……」

主の純情を弄んだ、責任はどうして頂けるんですか?

竜驥虎視が初めて、俺以外の人物に聞こえるように言葉を発した。今まででは念話で、俺にだけ話しかけていたわけだが。

まあ、特に注意する気もない。

普段から余り喋らせる機会がないだけに、こいつには申し訳ないと

思っている。

折角意志が与えられているといつのこと、普段あまり構つてやれてないし。

こうこうの機会でもなければ、俺以外と会話するなんてこともあるまい。

「おお、うへー喋つたつスよー。」

失礼な。私は主の愛の奴隸、竜驥虎視。愛称はリョウウコです。親しみをこめてリョウウちゃんと呼ぶのです！

「リョウウさん？！奴隸なんて誤解を生む発言は止めて下さい！それから名前被るから、止めてえーー！」

無駄に機械音声っぽくない可愛らしい声で、「奴隸」という発言は俺の株を大幅に下落させるという恐ろしい能力を秘めている。このやり取りの前から十分ストップ安な気がするけれど……

「なんといつか……個性的なデバイス、だな…………」

「リョウウ……何でいつも人様と話すとき、そんな調子になるんだよー。」

何度も注意してますけど、貴方はあの事件以来身を狙われる可能性だってあるんですよ？すぐに他人を信用するのはいつも貴方らしくありません

再び念話で、俺にだけ届くようにして発せられたその言葉が意味することは、俺への気遣いだった。

「すいません、少しへいにに行つてもます」

へりへりと作り笑顔を浮かべて、そそくわとやの場を立ち去る。

「リョウコ、お前なあ……」

男子トイレに駆け込んで、誰も居ない事を確認してから、呆れた様に言った。

貴方は楽観視しそぎなんですよ？

一方、リョウコは随分と深刻そうな様子で、俺を諫めようとしているのが伝わって来た。

昔から、いひこいつといふだけは変わらないよな……

相棒のそんな心遣いが、少しだけ嬉しかった。
当たり前なようで、そんな当たり前が幸せなんだ。

「別に俺は俺自身のことを一番、誰より知っているつもりだよ」

分かつて居るのでしょ。其のアレはあらゆる魔導師に対する
「それも知ってる」

俺も持つ能力は、ちょっと変わり種と言つか、前例がないだけに色々と扱いが面倒なのだ。

それはあの事件以降、何度も言われ続けて来た事だ。
自覚もしているし、実際に使う事に対して恐怖感もある。
だから、滅多な事がない限り使う事は避けて来た。

でしたら、何故あのよつとよく素性も知らぬよつな……

「リョウコ、お前は神経質すぎるんだよ。それにな、俺はあの入った
ちは絶対信用できると思つてたんだよ」

絶対、ですか……

「ああ、絶対だ。ヴィヴィオの師匠とお友達つてだけで信じるに値
するよ

何ですか？あの女のビニがそんなに良いんです？

少し不機嫌そうな声が、トイレの中に響き渡る。

どう考へても論点がズレているぞ。

これじゃあまるで、俺が誰か女性をトイレに連れ込んでいるみたい
じゃないか……

幸い誰も居なかつたから、そんな勘違いされる心配もないんだけれ
ど。

俺とリョウコが互いに念話すつやあ、いつやつて席を外す必要性も
なかつたよつと氣もするな……

「惚れた女くらいい信じるぞ」

は、はあ？！あ、あ、主？惚れたとはあの、所謂一田惚れというヤツですか？！ちなみに言つておきますが、決してお米のブランドなどではないですよ！

いつもはもつと聞き取りやすい筈なのに、早口で所々呂律が回つていないよつた感じ。

「冗談だよ」

「冗談……？」

「や、半分くらいはね」

半分くらいって、どういう意味ですか？！

勿論彼女には好意はある。

だが、それは恋愛とかそんな類のモノではない。
多分どちらかと言えば、保護欲とかその類に繋がっているんじゃないだろうか。

妙に可愛らしく、ちいさく、人懐っこい。

「能力をあの娘達の前で使うつもりはないし、問題ないだろ？」

「どうして……そんなに彼女達に信頼を寄せているのですか？」

「さあ、どうしてだかなあ……直感と言つたが、本能的に、と言つた

ケダモノ……

「やつこつ意味合いじゃなによー?」

ないと断言できるんですか?

「それは出来んが……」

ふん……もう知りません。好きになさつて下せ
拗ねたよつな可憐らしい声。

何だ、ちゃんとこいつこいつもあるんじゃないか。

「やつ、か……」

一つだけ言つておきますが、私は彼女達を信じたのではなく、主
貴方を信じたのですよ?

「ああ、分かってる ありがとな、相棒」

分かつているのなら……良いです

相棒と呼ばれて、少し照れ臭かつたらしく、暫く大人しくなつてしまつた。

下心が大半つてことはあまり知られたくない事実であるが、何とか
有耶無耶に出来たぜ……

だつて、男の子だもん。

自分の欲望には正直に生きたいよね、うん。

やつぱり、ケダモノです…… 一体どこで教育を間違つてしまつた
のでしょうか……？

バレテーラッ？！

「あれ……？ 何か人集まつてるな」

トイレから戻ると、練習場の周りに謎の人だかりが出来ていた。
何か楽しいイベントでも始まるのだろうか？

「遅かつたけど、大きい方？」

「ウェンディさん、下品な」と言わないでください。 つてか、何で
すかこの人だかり？」

「2人の組手、凄いからね。 きつとびっくりするよ」

コロナがどこからともなく現れて解説をしてくれた。
その脇にはリオもいる。

「いつの間に大人モードになつてたんだ……？」

いつぞや魔法練習場で見て以来の姿だった。

「いくよ、ノーヴェ」

「おひよー」

緊張感がこの場を支配する。

この場にいる全員がそれを感じ取ったのか、水を打ったように静まる。

こういう場合、先に動くのかも重要なポイントだ。

場合によっては最初の一撃で決まってしまうこともある。
はたまた、最初の一撃に対してのカウンターが決定打になることもある。

両者のレベルが高ければ高いほど、一撃で決まる確率は高くなる。

長い、長い沈黙。

だが観客である俺は、固唾を飲んで見守る事しか出来ない。
呼吸音すら彼女達の戦いの妨げになるような気がして、思わず呼吸する事すら躊躇ってしまう。

それ程の緊迫感。

その動きの一拳手一投足を見ようと、目を見開いて観察する。

俺が目を閉じ、瞬きをした瞬間に、何かを叩くような音が一度聞こえた。

再び目を見開いた瞬間 瞳に映った映像を見て、驚愕した。

ノーヴェさんの姿。

充分にあつた間合いを瞬く間に詰めていた。

だが、それだけではない。

地面に着いている脚は右脚一本で、左脚は地面から離れていた。

そう

彼女は距離を詰めただけでなく、既に攻撃の体勢に入っていたのだ。あの音は地面を蹴った音か、踏み込んだ時の音だろう。

トレーニング施設で怪我防止のために、床は畳に良く似た軟らめの圧縮材を使いられているため、アスファルトなどとは違い、音が響き易いのだ。

ノーヴェさんの左脚が、綺麗な円を描くようにしてヴィヴィオに襲い掛かる。

だが、その蹴りの終着点を事前に読んでいたヴィヴィオは、右腕を顔の前に差し出していた。

ヴィヴィオは脚が腕とぶつかり合つ瞬間に、僅かに肘と腰を動かし、力を受け流す。

非の打ちどころのない、完璧なガードだった。

だが間髪入れず、ノーヴェさんが右拳を叩き込む。この拳の届く間合いを正確に読み取つていたらしく、ヴィヴィオは身体を反らす事で回避する。

それも最小の動き 紙一重で躱したのだ。

そして、ヴィヴィオの回避方法は次の攻撃の為の布石でもあった。その体勢を戻す反動を利用して、左ストレートをそのまま 突き出した。

防戦一方のように思えた展開であつたが、ノーヴェさんが次の一手を投じるよりも前に、攻撃に転じたのだ。

だが

ノーヴェさんは、まるで最初から分かつていたかのように ここでカウンターが来る事を予知していたかのように、既に左腕はガードの構えを取つていた。

それだけでは確実に防ぎきれないと察したのか、左腕の上に、突き出して いた右腕を引き寄せて、十字に重ねる。

両腕のガード クロスマームガードの体勢に入つていた。あの右拳を叩きこんだ後、攻撃するつもりだったのなら、両腕をガードに回すような余裕はなかつた筈だ。

最初から、クロスマームでガードするつもりだったとしか思えない動き。

仮に、そうでなかつたとしても、その判断力は流石の一言に尽まる。こうじう自分が優勢に立つてゐる状況では、ついつい田の前の“勝ち”を取り急いでしまう。

だが、ノーグエさんは違つた。

相手の実力を鑑みた上で、この場は一端受けに回るべきと判断したのだ。

だが、彼女を評価するにはまだ早い。

次の攻撃がすぐそこに迫つて来ているのだから

ヴィヴィオは左拳叩き込んだ勢いで少し前のめりになつてしまつていたが、そのままその体勢を利用して、右脚を軸にして左脚の回し蹴りを叩き込んだ。

崩れた体勢を逆に利用して、攻撃のために使つたつてわけか……
残念ながら、ノーグエさんは軽い身のこなしでその回し蹴りを躱した。

回し蹴りの後……ちょっと隙があるように見えるが……?
気のせいか……俺程度に気付ける筈もないよな。

しかし……とんでもないモノを見ちまつたなあ。

両者とも涼しい顔をして、こんな事をやってのけたのだ。
背筋に震えが走った。

「ふたりともやるもんっスなあ」

「はいー。」

「……にしてもヴィヴィオ身体、柔らかえな……あの上体反らし、
俺なら腰傷めるつて」

あまりの出来事に一瞬言葉を失つていたが、何とか言葉を紡ぎ出す
事に成功した。

そして、2人の戦いを見て冷え切つていた身体が、徐々に熱を取り
戻し始めていた。

どくんどくん、とやけに五月蠅く感じる心臓の鼓動。

血流が分かる気がする。

熱が心臓から全身に広がつて行く感覚。

相変わらず鼓動は五月蠅い今まで、何故か気分が高揚してくるのが
分かつた。

そして、気付けば一ヤリと笑みを浮かべていた。

全く持つて気持ちの悪い所業だ。

「先輩、年寄り臭いですよ……」

「お黙り　つてライ　一キックだよ、かつけえ！！」

ヴィヴィオの飛び蹴りとノーヴォさんの回し蹴りが激突していた。あの飛び蹴りの姿はどう見ても、幼い頃に憧れた有名ヒーローの必殺技だ。

「今みたいに軽くやつてみるか？スッキリするぞ」

軽い組手が終わったらしく、ノーヴォさんが涼しい顔でこちらに床つて来た。

あれで軽いって……激しくなるどうなるのさ？
想像しただけで恐ろしいぞ……

ヴィヴィオはまだ型の確認なのだろうか、左拳を虚空へと突き出している。

その後、回し蹴りを放つ。

動作を確かめるように、ゆっくりとした動きだ。

蹴りを撃ち込んだ後には、軽く後ろに跳ぶ。

先程ノーヴォさんに見事に制されたコンビネーションか。

向上思考が凄まじいな……俺には到底真似できそうもない。
だが、軽く後ろに跳ぶのは“仕切り直し”としての意味合いがあるのか、俺が考えた通り“隙があるから”なのか……
この辺は実際にやり合ってみないと分からんだろうな。

しかし、あれだけ動いて汗1つかいていない様子を見ると彼女たちの実力は一体 ？

「いえ、流石にあのレベルを見せつけられると……」

正直やり辛いつたらありやしない。

周りの見学者さんからすれば、連れの俺も同じレベルだと思われているわけで……

何と言うか、期待の眼差しつていうのかな？それが突き刺さるんだよ。

当然あんなレベルの芸当は出来ない、そう言いきれる。あんなのとまともに渡り合える筈がない。

「ちょっとグイグイオ、相手してやれよ

「良いですよー」

軽くオーケーしようとしたで、この娘……

「ストレス解消に良いんじゃないスか？」

「俺、ストレスなんてないんで結構ですよ?ー」

「大丈夫ですよ、本気でやるわけじゃないですからー」

「一応何かしらの心得あるんなら、大丈夫だろ?」

「いや……細かいルールも知りませんし」

「何この流れ……？」

嫌な予感しかしない。

やっぱ、今日ここに来た事は、何かの間違いだつたんじゃないかな？

「簡単。魔力強化のみの打撃によるダメージを防ぐ競技だ」

「柔道や剣道みたいに1本で勝負ありみたいなことないんですねえ……」

あの手の一瞬の油断が敗因に繋がる競技なら、まだ可能性があるんだが。

この競技はラッキーパンチ1発で倒してくれるほど楽なものでもないだろ？。

ま、柔道や剣道が楽に勝てる競技ってワケでもないけどさ。結局は一番才能があるやつが、努力したやつが勝利するのが普通だろ？さ。

「じゃあノックダウン制にするか？」

「それなら、すぐに倒れて逃げますし……途中ヤバかったら助けて下さいよ？」

男の子なら耐えなさい

「はい……」

リョウ介の一喝で渋々参加することになった。

さつきは俺のことを心配していたくせに、参加を促すつてのはなぜいつわけだ……？

ちょっと、からかったのがマズかったのだろうか？

と言つわけで、ヴィヴィオと組手を行つことになった。

大人モードで、手と足の長さは向こうが上。つまり、リーチはあちらの方が上つて事だ。

加えて、魔力総量とあの変身魔法の性能も鑑みて、パワー、スピード共に相手の方が上であろう。

敗戦濃厚……ま、そこが俺の定位置だ。
何を今更恥じる事があろうか

いや、ちょっと訂正。

この観衆の中で惨めに負けるのは、ちょっと恥ずかしいです……

結局、俺が敵いそうなものは精々反射神経だろうな。
アレばっかりは魔力による底上げも難しい。

まあ、難しいだけで実現不可能つてわけじゃないんだが……

ルール的にはまだ可能性がないわけでもない。
今回は特別にスリーノックダウン制を採用している。
名称の通り、3度倒れると負けだ。

ノーヴェさん、わざわざ俺にも多少可能性のある方法を提案してくれたようだな。

もつとも、俺の戦い方じゃあストレス解消とは程遠いだろうけど。
力負け必至なのに、わざわざ真正面から突っ込むってのは自殺行為だ。

よつて、相手の油断を誘つておいてのカウンター　　この一択しかあるまいよ。

「じゃ、準備良いか?」

「はい!」

身体強化魔法を発動させる。

何度も手を開いたり、閉じたりを繰り返し効果が反映されたかを確認する。

「大丈夫です」

力強く一言、そう咳き眼前の“敵”を見据える。

金色の髪にオッドアイ、恵まれた魔力資質と、訓練環境、そして何よりあの“高町なのは”さんの娘……

対する俺は、魔力資質既無に指導者も既無。

勝てる道理などない。

でも……

だからこそ 挑む価値がある!
負けることなど承知の上だ。
大切なのはそこから何を得るか、だ。

こんな事自分に言い聞かせたところで、負けを正当化しているだけ
か……

「はじめー」

余計な事を考えるのは後回しにしよう。
今は、こっちに集中だ。

拳を握り、ゆつたりと構える。

先程の組手と同じく、互いに動かない。

いや、俺の場合動けないんだが……

先程も言つたように、非力な俺から突つ込むのは自殺行為。
基本力ウンター狙いのつもりだ。

だが、こう手をこまねいていては俺の魔力が底を尽きちゃう。

魔力を全部使い切るつもりで強化して、もつて15分。

俺は少ない魔力を扱う分には魔力効率は良い方なのだが、一定量の魔力を超えると急に魔力効率が下がっちゃう。

魔力の特質というか、リンカー コアの特質だな。

だから、この15分強化が一番効率が良いのだ。

ちなみに魔力効率って言うのは、消費した魔力量に対しても実際に仕事をした力の割合を示す。
仕事率なんて呼び方もある。

呑気に脳内で語っているのにも関わらず、ヴィヴィオはまだ動かない。

まだか……？

落ち着け、焦りは敗因に繋がる。

「…………」

しかし、動かんな。

この間合いなら、動いてきた相手にカウンターを合わせるのにもそんなに苦労しそうに

“ない”と心中で呟く前に、ダンシ と地面を蹴る音と共に、5メートル余りの間合いを一気に詰められる。

速えツ！！

咄嗟に後ろに軽く飛び、両腕をガードに回す。

「はあああーー！」

彼女の拳とガードしている腕とぶつかる直前に、僅かに後ろに跳んで威力を殺す。

「ツー！」

だがぶつかり合った直後、激しい衝撃が腕から足先、頭の先まで駆け巡る。

まるで雷にでも撃たれたかのよつな、そんな錯覚を覚える程の衝撃。地に足が着いていない事に気づいたのはその後だった。

ドタンと尻もちを付いた俺は、ただただ惨めだったろう。

だが、おもしれえ……実戦的つていうのか？
こういう健全な実戦つてのは初めてだからな。

勝てればさぞ気持ちいいだろ？

それが汚い勝ち方であれば、あるほど、な……

状況的には圧倒的に不利な筈が、自然と笑みがこぼれてくる。

一瞬、リョウ「のクスリと笑う声が聞こえたよつた気がした。
わざわざ戦つように促したのは、俺がどこかでこいつのを望んで
たつてのを察して、か……

確かに、ノーグンさんとヴィヴィオの戦つ姿を見ていたら、こいつ身
体を動かしたくなつたと言うか、じつとして居られないと言うか……
こいついう感情は初めてだから、どう表現して良いのか分からんな。

それでも、悪い気はしねえつて事だけは確かだ。

「だ、大丈夫ですか？！」

「ああ、平氣だ」

ヴィヴィオが尻もちを付いた俺の方にやつて来て、「すみません、
ちょっと急でしたよね。『めんなさい』なんて言いつつ、ペロペ
ロと何度も頭を下げる。

優しいな……リョウコ、やっぱ俺の見立ては間違っちゃいなかつた
る、つー。

先程のトイレでの一件を思い出して、心の中でリョウコに呟いた。
伝わつているかなんて分からない。

それでも、アイツもちょっとは刺々しい態度を改めてくれることだ
らう。

先程ヴィヴィオさんの服から、チラチラと見えていたお臍を注視
していました！！ケダモノです、変態です、不潔です、不純です！
それから不相応です！

俺に対する態度も色々な意味で改まりそうだ……
それに最後の不相応つて……色々と酷くないか？

「後2回で負けだぞ。さ、構えて」

ノーグンさんに痴されたので、拳を構え、どうしたものかと考える。

パワー負けは予想していたが、ここまでとはな……

まともに撃ち合つて勝てる筈がない。
予想は的中。

実は少しだけではあるが、その予想が外れることを期待していたんだが……見事に撃ち壊してくれやがった。

相手は過大評価するくらいが丁度良い　　つて教えはマジみたいだな……

ゆうぐじと両腕をクロスさせて、ガードの体勢を最初から取る。

一瞬辺りが騒がしくなった気がする。

ま、みつともない姿だらうしな。
でも現状じゃあこれがベストだ。

一撃でもまともにもらっちゃあ終わりだ。
ダウン数以前にアレを受けたら、完全に意識を持つていかれちまつ。

「はじめー。」

今度は合図と同時にヴィヴィオが飛び出してくる。
こちらが防御の構えを取っている以上、攻めて来ることないと判断したのだろう。

今度は鋭い蹴りがこちらの脇腹を抉りつつ迫ってきて来る。

「後ろに下がって駄目なら　　ーー。」

今度は逆に前に出る。

脚が伸びきる前に、血ら当たりに行く事で威力を抑えるといつ考えた。

バシン と生々しい音と共に、再び電流のようなものが腕から全身に走った。

痛みだ。

だが、そう判断した瞬間には、それがなくなっていた。
後退と違つて、まともに受け切つちまつたのが仇となつてしまつたらしい。

ダメージか、ダウンか……この一択つてわけか……

「 両腕使ってガードしてコレかよ……」

感覚を奪われた両腕と、後ろに倒れそうになつていていた自分の体勢。
これじやあ何発もガードしきれん……回避に専念して、両腕の感覚
が戻るのを待つべきか？

「 次行きます……」

思考させまい、とヴィヴィオの猛攻は続く。
今度は左ストレート。

恐らく、これは囮で次の一撃 回し蹴りが勝負手だろう。
後ろに回避したところに、拳よりもリーチが長い蹴りの間合い内だ。

加えて、痺れた腕でガードしきれるとも思えん……

そうと予想しつつも、左ストレートを大げさなほど距離を取つて回避する。

美脚が一いつ瞬間に向かつて飛び

だが、ある程度は予測できていた。
だから

その脚を払つた。

ドタン 可愛らしく尻もちを付く、ヴィヴィオ。

自分の身に何が起つたか分からぬいような、そんな表情。

「悪いな。左ストレートの後の蹴りはさつきの組手とかで、何度か見せてもらつたからな」

口では余裕ぶつていっても、内心はかなりヒヤヒヤしてくる。
上手くいく保証なんてなかつた。

だって、今のは俺の出身世界の中学生が柔道で競り合つたものだぜ
……？

やつぱり、どんなに変則的な技よりも、実戦で役に立つのはこの二つ
の基礎技なのかもしない。

「今日は
」

「出足払い。初歩中の初歩だぜ？」

「煽るだけ煽つてみる。

これでペースを崩せたんなら儲けもんだ。

だがどうする？

さつきのは次の手が分かつてたから対応できたものの、攻撃パターンを変えられちゃあ対応のしようがない。

厳密に言えば、確実に蹴りが来るとは思つてはいなかつた。
確かに確率は高かつたかもしれない、だが高くても100%じゃない。
い。

今のは運が良かつた。

運にすがるより他に手がなかつたのは、力量差故だ。

動きが速くて、動いたのを確認してからでは間に合わん……
それに回避にしても、精度自体は最悪。
これに対しても手を考えねばなるまい。

そういうや、爺ちゃんから習つたアレって使える……か？

仕組み自体は同じだし、~~余分~~いける筈……

だが、それはタイミングが命だ。

それもまたさつきみたいに運任せにするか……？

運任せにするつて言つても、大まかなタイミングが全く読めなくち
や話に

いや……ちょっと待て。

成程……その手があつたかッ！

こいつを使えば、大凡のタイミング合わせは出来るー。

まあ、そつから先は例によつて運任せなんだがな。

闇雲にやるよりはずつと良い。

1%でも勝機があるつて言つんなり、諦める道理はねえよな……！

「構え」

いつの間にか起き上がつたヴィヴィオを前に、ある策を講じるべく
頭の中でイメージを描く。

「はじめー」

ダウンの数は1対1。

第5話（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

今回は +7.90KB

倍近く増えています。

よもや説明回である第2話を超えるとは……

自分で書いて予想外。

リョウコの気遣う場面や拗ねてるところを追加。主人公のデバイスなので、それなりの出番と人気獲得をしなくては……

それから、戦闘シーンの描写追加。

漫画にして数コマに満たないシーンで、それなりに頑張ってみました。

主人公の動きと比べて、原作キャラクターの凄さが伝わるよう色々試行錯誤しました。

踏み込みが見切れないのに、細かい動きが見えているのは、致し方ないと言いますか……

何も見えなかつた、で終わるよりは、こうして書いた方が凄さが伝わると思いましたし、味気なさすぎると判断してこうなりました。説明中はこの間僅か0.1秒とか、そんな感じです。

次回も修正箇所がやたらあるので、更新が遅れるかもしれません。この点、ご了承下さい。

感想下さると嬉しいです。

ではでは

第6話（前書き）

遅れましたが、第6話です

第6話

ストライクアーツのスリーノックダウン制での組手。対するは高町なのはの娘 高町ヴィヴィオ。先制されてしまったものの、何とか喰らいついて1対1にまで持ち込んだ。

魔力総量、パワー、スピード、いずれもこちらが下回る。こんな状況下において、先程の出足払いが決まったのは偶然や奇跡の類だ。

起死回生の一手、と言つには少々大袈裟かもしれないが、なんとか首の皮一枚繫がつた。

だが、彼女は同じ轍は踏まないタイプだらう。

あちらは恐らく、あのコンビネーションは繰り出してこないだらう。そんでもって、出足払いに対する警戒もしている。

よつて、同じ手でダウンを取るのはかなり難しい。

初見、一度きりの手 そんな事は分かつていた。

だが、出足払いの警戒のために、一いつの脚にある程度意識が行つ

ちまつ筈……

それを逆手にとつて、拳を叩きこむか……？

いや……それじゃ、駄目だ。

思い上がるなよ、俺は非力なんだ。

俺の拳如きでダウンを取れる筈がない。

落ち着いて状況を把握し、出来る事をしろ……

全ての思考を一端停止させて、大きく深呼吸。
取り入れた空気が、身体の熱を外へ逃がしてくれたような気がした。
そして、少しばまともな思考が出来るくらいには頭を冷やす事が出来た。

先んじて手を出す事は、考慮していなかつた筈だろ？

それが功を奏してダウンを取れた。

故にその戦法を崩す必要はない。

寧ろ、上手くいったのだから、そのまま突き進むべきだ。

こちらから攻撃を仕掛けたところで、躱されるのがオチだ……
その一撃にカウンターを叩きこまれる、という結末まで容易に想像できる。

多分、ダウンを取れて嬉しかったんだと思つ。

あんな馬鹿げたような動きをする相手から、偶然であつたとしても
ダウンが取れた。

その事実は何よりも嬉しくて、もつと自分の力を試してみたい
そんな感情が生まれてしまった。

らじくない……か。

少しは変わらただろうか?
あの頃から

ボーッとしてないで、前を見据えて下さい

そんなリョウ介の声で、現実に引き戻される。

「そりだつたな……今は 田の前の事に集中しよう! 關係のない
考え方は、こいつが終わつてからだ!」

相手の動きが速くて見切れない。

動きの速度が尋常じやない。

動いたのを確認してからじや間に合わない。

気付いたら既に相手の間合い。

辛うじてガードは出来たが、相手の一撃一撃が重く、いかにも対して必殺級の破壊力を持っている。

先程ガードした際の、腕の痺れ それが証明してくれている。

そういうや、爺ちゃんから習つたアレって使える……か？

祖父から教えてもらつた、ある技術が脳裏をよぎつた。

仕組み自体は同じだし、多分いける筈……なんだけど。

問題は、俺が相手の動きに付いていけないってことだ。
相手の動きに付いていけなくちゃ、繰り出すタイミングを合わせられない。

特にタイミングが鍵となるこの技術においては、かなり重要な問題だ。

どうが、タイミングを合わせる術がないものか……？

いや……待て。

成程……その手があつたかッ！

こいつを使えば、大凡のタイミング合わせは出来る！

今回限りの応用の利かない手ではあるが、今はそれでも充分だ。
寧ろ、その方が俺らしくて良いじゃねえか。

「はじめ！」

審判役であるノーヴェさんが試合再開の合図を行う。

先程までのように視線を身体全体でなく、爪先と腕の動きに集中する。

身体が動いた後で間に合わないんだったら、初動である程度のタイミングを読む。

爪先が少し動く。

この間合いじゃ蹴りつてことはない。

なら、距離を詰めるためか！

思い切り後退して距離を取る^{ひく}とするが、それよりも速く彼女が突っ込んで来る。

だが、ある地点でピタリと動きを止めた。

俺の脚の届く範囲　俺の蹴りの間合^{あいだ}いだ。
成る程、どうやら警戒してたみたいだな……

わざの一撃は決して無駄なんかじゃなかつた　！

今までの彼女ならば迷わず突っ込んで来るところを、あえて脚を止めて警戒したんだ。

いや……それでもペースが崩れたと判断するにはまだ早い。
寧ろ慎重な対応と言えよう。

彼女の些細な行動を見て喜々としていた自分を少しだけ諫めて、相手を見据える。

あの程度では崩せん、か……

そりゃあ、あの人 高町なのはの娘なら、このへりこじや駄目だろ？

このまま攻撃に持ち込まれたら、たまたまんじゃない。
一度体勢を立て直すか、仕切り直したいところだな……

だったら、仕切り直しだ

バックステップで後退して距離を取るつとするが、それを確認して
ヴィヴィオの爪先が地面を蹴る。

どうやら安全圏まで、退避はさせてもうえないようだ。

後退する脚を止めて、牽制目的で再び出足払いを放つ。

ヴィヴィオはそれを読んでいたかのように、素早く脚を引き戻し、
その脚を軸足として蹴りを放つ。

今度はこいつに出足払い ！？

完全にしてやられた！

急いで脚を引っ込めるが、体勢が崩れかける。

しました！？

この隙を彼女が見逃す筈がない。

いや 元より、こちらが本命か。

最初の払いで倒すつもりなど、毛頭なかつたのだろう。
ヴィヴィオは払うために出した脚を使い、そのまま大きく一步踏み
込んで来たのだ。

この間合いは蹴りじゃない！

加えて、脚先は地面に付いたま

「 ッ

脚の動きに気を取られて、腕の動きをうぐく見ていなかつた！！

彼女の右拳が迫るのが、スローモーションのように感じられた。

このタイミングじゃ、ギリギリ躱したといひで蹴りの間合い内だ。
今よりも崩れた体勢で、蹴りを受け切れる筈がない。

だったら

俺は崩れた体勢のまま、思い切り地面を蹴って跳んだ。
少し浮遊感を味わった後、重力によつて地面に叩きつけられる。

あの体勢のまま跳んだのだから、当然と言えば当然なのだが。

「 ッ！」

受け身も何もあつたもんじやない。

肘が腹の辺りにぶつかり、表情を歪めるが、あの拳の直撃よりはずつとマシな筈だ。

拳が直撃しなかつたにも関わらず、拳が風を切る音に思わずヒヤリとさせられた。

倒れ伏せたまま、その拳の放つた当人を見据える。
目が合つた瞬間に、思わず身体が固まつた。

真っ直ぐに俺の事だけを見据え、一切揺らがない。
表情は組手中だと言うのに、眩しそうの笑顔で、まるで楽しんでいるかのようだった。

そんな表情を見て、ちょっとだけドキッとした。

いや、だつて……女の子とこんなに見つめ合つ事なんて、滅多にないじゃないか。

見つめ合つて言つには、少々物騒かもしけないけど……

そんな事をしみじみと思つた瞬間、彼女が踏み込んで来るのが分かつた。

おこおい、そいつはシャレにならんぞッ？！

「待て！」

予想通り、ノーザンの声が響いた。

いや……声がかかるのは予想通りだつたんだが、ヴィヴィオが突っ込んで来るとこらは想定外だ。

顔色が酷い事になつてますよ？今更ながらですが、主つて、こういう想定外の出来事にはとおつても弱いですねえ
ヴィヴィオと同じよつてえらへ楽しそうな様子が、声からも伝わつて来る。

「やつは何故、俺のピンチで喜んでいるんだよ……？」

しかし、想定外に弱い……か。

確かに、そういう傾向があるのかもしれない。
こういづのは性分の問題だから、直そうにもやつ簡単にはいかない
もんや。

「やつ、もう場外だからな。一度目は見逃すが、二度目はなー」と思
えよ? 「

少し、苦笑しながらそつ忠告するノーヴェさん。

わざと、場外へ逃げたからな。

場外に向かって大きく後退して回避すれば、回避と同時にリングア
ウトで仕切り直し。

スポーツマンシップに反する行為であり、俺の得意分野。

こいつ小技でも使わないと、まともにやりあえない……

自身の行為を正当化するつもりなどはない。
卑怯だと言つ事は分かっている。

だからこそ、使うんだ。

基本的に、相手と同じ土俵で勝負するつもりはない。
するとしても、相手をこりら側で引き込んでの、泥試合だ。

「はい、以後気を付けます」

一度目はない、か……

一度目を認めてくれるだけ、ありがたいもんさ。

所定の位置に戻り、再び構える。

右拳を握り込み、再びヴィヴィオの足元に視線を移す。

全ての神経を集中させる。

相手の脚が地面から離れた後の、最初の変化に気付かないと……

そうしなくちゃ、負ける……

「はじめ　ー」

再開、その号令と共に地面を蹴る音が響いた。

その音を聞いて、素早く右拳を大きく振り上げる。

そして、その音からほんの一息の後、もう一度音が聞こえた。
俺は素早く一步後退し、そして

右拳を眼前に振り下ろした。

拳に何かが衝突した衝撃が身体を駆け巡るが、そのまま構わずに振り切る。

「 ？」

一撃をいなされて、口を開け驚いた様子のヴィヴィオが居た。そんな表情がどうにも心地良く感じる。

しばらくして彼女の口は閉じ、横に伸び、驚愕から笑みへと変わっていた。

今のは祖父から習つた、 “切つ先落とし” という技術だ。

相手が腕を伸ばし切るより前に、自分の獲物 今回の場合は拳を振り下ろし、威力が最大になる前に制する技術。

打ち下ろしと難ぎ払いの2パターンがあるが、ようは弱い力でも攻撃をいなすことができるのだ。

強い力に対し、正面からぶつかつたのでは衝撃は全てこちらに向かって来ることになる。

これは打点をずらして力を逃がすので、少ない力でも相手の攻撃を無力化できるという、何とも俺向きな技術だ。

繰り出すタイミングが結構シビアで、成功したのは“音”的お陰だ。相手が動く初動の踏み込みの音、そして一度目は攻撃の際の踏み込みの音。

何度か彼女の攻撃を見てきたが、競技として仕切られたコート内ならば、彼女は僅か一步で踏み込んで来る。

素早く移動するには、歩幅を狭くして脚の回転を速くするか、歩幅を大きくして跳ぶように動くかの一択になる。

長距離マラソンで言つてゐるの、ピッチ走行とスライド走行だな。

彼女の場合、後者のスタイルだ。

音が一度しかしなかつたのだから、勝手にそう判断した。

もつとも、俺の耳で捕らえられた音が一回なだけで、実際にはもつと多かったのかもしれない。

ま、結果的に上手く行つたから良いよな？

とは言つても、“切つ先落とし”にはタイミングの他にもう一つ、大きな欠点があるわけで。

それを悟られる前に勝負を付けないと……マズいな。

「ふうー」

一息吐いてから、先程と同じように右拳を大きく振り上げる。距離は互いの間合い内だ。

どちらの攻撃も届く範囲内。

彼女の小さく開かれた口からは、浅い呼吸を繰り返している事が見て取れた。

超近距離で、彼女の息遣いすらも聞こえてくるような気がした。些細な仕草に、思わずぞざきさせられてしまった。

大人モードなので、何と言いますか……目の向けどこりに困る。

特に胸の辺りとか……

そんな思春期特有の感情を押し殺して、彼女の脚と腕が視界に入るよう少しだけ上体を反らして、構える。

これだけ距離が近いと対応は難しい上に、後退する暇も与えてもらえないだろう。

いなした後、気を抜かずに間合いを取つていれば……こんな事態にはならなかつた。

思わず、握る拳に力がこもる。

爪が皮膚に喰い込み痛みを発生させるが、これは自分に対する罰としては丁度良いだろう、と割り切る事にした。

ヴィヴィオの重心が右脚に移る

ならば、来るのは左脚だ！

その予想通り、風を切る音と同時に、左脚が迫って来る。半歩後退して、腕をその脚に叩きつけるように振り下ろす。

振り下ろした後、彼女は少し体勢が前屈み気味になっていた。今、彼女には攻撃出来る術がない ！

だつたら ！！

カウンターで、蹴りのお返しと左拳を突き出す。

狙いは顔面 女の子の、それも顔に拳を向けるのは少々気が引けるが、どうせ当たらないだろう。

案の定、彼女は一気に上体を反らして、紙一重で回避する。ノーヴェさんとの組手で見た光景を脳裏で思い浮かべつつ、自分の取るべき行動をイメージする。

勝負はここだ ！

上体を戾した勢いでの拳

これを放つ瞬間こそが、俺が付け入ることの出来る唯一の弱点。

仰け反つた体勢から繰り出すパンチ。

確かに攻守の切り替えとしては有用な手であろう。

だが、今の彼女ならば付け入る隙はある。

彼女が練習する姿を見て最初に覚えた違和感

それは、魔力による姿勢保持だ。

本来魔力を使わない型の練習で、彼女はそれを使つた。

それを 魔力を使わなければ、体勢が崩れる事を意味している。

そしてそれは

魔力で無理矢理体勢を保つてゐる事を意味している。

そしてその体勢の脚を、魔力強化した脚を持つてして蹴り払えぱどうなるか？

魔力値の低い人間で、武術の素人で、馬鹿で、浅暮で、臆病者で、

無能な人間の蹴りであろうが

不安定な体勢の脚を蹴り払われば

バタン

再び尻もちを付く、ヴィ、ヴィオ。

「今のつて……」

「無理な体勢からの攻撃つてのは、確かに有効かもしね。だが、身体を傷める危険性に加え、こいつは問題点だつてあるんだぞ？」

あくまで余裕綽々の態度で接する。

冷や汗を流しつつ言つ台詞ではないが、精神面だけでも優位に立つておきたい。

運動量に似合わぬ汗の量で、額から頬にかけて流れしていくのを感じる。

これでバレたりはしないだろ？

表情は上手く隠せているだろ？

心配事ばかりが頭に浮かんでくるが、今は演じるしかない。

焦りは失敗を生む。

そこに懸けるより他あるまい。

俺の繰り出す手なんて、殆どは初見相手にのみ有効なものだ、というのは何度も触れた事だろう。

だからこそ、繰り出すタイミングがミソなのだ。

まあ、焦っているのは俺の方かもしれないが……

2対1

次に俺がヴィヴィオを倒したら、一応は勝ちになるわけだが……

さつきから、ヴィヴィオの目が結構マジになつて來てるのが普通に怖い。

俺が場外へ出た筈なのに、突っ込んで来たし……
あの行為が故意に行われていたのだとしたら……あからざるの思惑
通りなんだろ？

十分すぎる脅しになつてゐるのだから。

いやいや、負けるな。

ビビつてたら、こつちが負ける。

ペースだけは今のところこつちが握つてゐるんだ。

本当にペースだけ、なんだけどな。

だが、そう思い込ませるとこつちまでが相手の戦略だったとしたら？

俺は彼女の掌の上で踊らされていふ事になる……

そつだとすれば

「…………そこつちは考え方だと、思いたい…………」

思考を止めるのは愚か者のやうな事ですが、行き過ぎも考え方ので
すよ？

「…………分かつてゐるよ」

とは口で言つても、心中では気になつて仕方がない。
リョウコの氣遣いに感謝しつつも、握りしめた拳の震えは止まらない。
い。

冷静に、冷静に……

やたらと騒いでいる心音を落ち着けるように、心中で何回も言い聞かせる。

だが、早急にそういう懸念が消え去ることはない。
拭い去りつつしても、最悪の状況に陥ったビジュンばかりが脳裏に浮かんで来る。

胃の辺りからキリキリと走る痛みに、改めて自身の弱さを実感せられる。

肉体的にも精神的にも弱い。

まつたく……」こつあ、ひでえや。

あまりの自分の非力さに、思わず自虐的な笑みを浮かべた。

神経を研ぎ澄ませて、相手の微かな動きすらも見逃さないよつと自分に言い聞かせる。

先程と同じ要領で言えば、一撃、一撃田までは切つ先落として何とか対応できる……筈だ。

「はじめー」

ヴィヴィオが再び強襲。

だが 踏み込みのタイミングは、大凡掴んだぞ！

最初の踏み込みの音を聞いて、大きく右に身体を移動させる。

俺の身体の脇を、彼女の左ストレートが通過していった。
挨拶代わりという感じの軽い左ストレートだった。

次に来たのは右の拳。

回避は難しいので、切つ先落として叩き落とす。

少し前傾姿勢になつた俺の元へ、右脚が床から浮いている様子が目に飛び込んできた。

さつきの右拳の踏み込んだ左脚を軸足として、そこからの蹴り。

そう予想し、咄嗟にガードの構えを取るが

ヴィヴィオはその脚を戻した。

「しまつ

」

しまつた、と言つより先に飛び込んでくるのは彼女の左ストレート。

ガードを拳の方向に修正する。

ガードを左でこじ開けられ、ガラガラに空いた身体に右拳が叩き込まれた。

「があ……痛ッてえ！」

一瞬息が詰まる。

頭がクラクラしていて、平衡感覚も失われているらしい。

床に叩きつけられ、再び痛みに表情を歪める羽田になってしまった。

咄嗟に後ろに飛んでなかつたら……一体どうなつていたのだらうか？
そして何より言いたい事が1点だけある。

「痛え……手を抜くつて言つたじやんッ！」

嘘吐きい。

今明らかに手を抜くという行為に対して、手を抜いたよね？！

いや、十分手は抜いてもらつてますよ……？

「……分かつてゐよ。んな事くらい」

尻もちとか言つ「レベル」じゃなく、完全にダウンだ。
天井が見える。

敗北者しか見られない光景、だろうな……

「大丈夫か？一応後ろに飛んでたように見えたけど……」

ノーヴェさんが俺の顔を覗き込む。

「大丈夫ですよ」

「よつこらせ」と爺臭い台詞を言つて起き上がる。
鳩尾のあたりに鈍い痛みが走るが、動けない程じゃない。

別に痛みが快樂に変わるとかいう性癖はない筈なのだが、妙に心地
よく感じる。

楽しいな。

こういうのも悪くない、かな……？

2対2、か……

もう一度、彼女の体勢を崩しにかかるつて手しか思い浮かばない。

ダウン数的には互角のよう見えるかもしれないが、リョウウの言う通り、ヴィヴィオはある程度手を抜いてコレだ。身体強化に使う魔力量など、先程のノーヴェさんとの組手で使用した量の半分以下。

つまり、破壊力などもその分下がっているわけで。

それでもこのザマだ……

「はじめー。」

組手開始時と同様、互いに動かない。

あの子の癖を利用する……妙に嫌な予感がするが、それ以外に手は浮かばん。

癖なんて早々簡単に修正できる筈がないのだから

「…………」

「…………」

蹴りがまず飛んでくるので、切つ先落として対応。続けての左拳は俺の顔面を狙っていた。

顔を傾けてなんとか回避に成功する。

少し頬を掠つて、耳はゴオっと風を切る凄まじい音が聞こえる。

一瞬鳥肌が立つたが、これはチャンスといひながら右拳を繰り出す。

だが、彼女は上体を反らして回避する。

待っていた　この瞬間を！

2回目のダウンを取ったときと同じ状況

これなら　！！

先程と同じように脚を払おうとするが。

払えない　？

体勢が崩れていらない……？！

まさか、これは？！

「罷かッ？！」

氣付いた時には既に手遅れ、こちらが出している脚とは反対の脚つまり軸脚をすくわれる形となつた。

当然体勢を崩される。

ドタン

虚しく俺が倒れる音が室内に響き渡る。

勝負がついた瞬間だつた。

どこか冷たく感じる床からは、敗北感

組手は当初の予想を裏切ることなく、俺の敗北で終わつたわけだ。思つたより善戦できたのは、ヴィヴィオがある程度手を抜いていたお陰であり、本気なら一回ダウント取れていれば良い方だ。

「ふうー、はあー」

大きく深呼吸。

重い腰を挙げて、頭を深々と下げる。

「あつがとへりぞこました」

「そうこや、始めたときに礼してなかつたなと思ひだす。
爺ちゃんに知られたら怒られるなあ……」

礼で始まり、礼で終わるつてのが日本の武道における教えである。

「あつがとへりぞこました」

晴れ晴れとした表情のヴィヴィオ。

「色々と勉強になりました！」

「「」」」」もな。最後のアレ、見事に騙されましたよ

「咄嗟の思ひに付きでやつたんですが、たまたま決まつただけですよ
「それ言つやあ俺の取つた2本、全部運で決まつたようなもんだけな

咄嗟で思ひつくなんて恐ろしい真似をしやがるなあ、一歩間違えれば自滅だぞ。
自分の弱点すらも、いつこう形で利用するつて姿つてのはとても参考になる。

「ガードと回避の後に使つたのつて？」

「ああ、『切つ先落とし』のとか。よつは相手の攻撃が最大になる前に叩き落とすつてやつだな。攻撃をいなすつて言えれば分かるか
？」

「原理自体は分かりますが……」

「お前の動体視力なら楽に出来そうだけじな

「でもタマミングとか難しくないですか?」

「相手の腕の動きを凝視して、ある程度目が慣れてくれば出来る
と思うわ。まあ、もう一つ“音”ってのも大きな助けになつたんだ
けどな」

「音つて……もしかして、地面を蹴る音ですか?」

「流石優等生。察しが良いな。まあ、お前が本氣でやつてたんなら
……いなすなんて芸当、無理だつたらうつけどな」

「わたしは本氣でしたよ」

「身体強化に回す魔力量が、ノーヴェさんと組手してたときの半分
以下だつたのにい?」

意地悪な質問をしてみる。

「や、やつぱり気付いてたんですか?」

「そりゃあ気付くよ。魔力の感知だけなら、お前に負ける気がしね
えな」

「それ以外はやつぱりだけじな」と自虐的な呟きを付け加える。

「涼さんは、何か武術の経験あるんですか？」

「祖父からちょっと教わった程度だ。“切つ先落とし”にしても教えによるものだよ」

「お爺さんって強いんですか」

「まあな。魔力皆無の癖に魔力強化した俺を1分もからずノックダウンするぞ」

「あの人は単純な体術オンリーでとてつもない強さを持つている。こちらの力の方が強かるつが、あの人の前には些細な問題でしかない。」

不利な状況にあっても、勝機は必ずあると教えてくれたのも爺ちゃんだ。

圧倒的な差があれば、相手はその分油断する。いくら注意したところで、油断は生まれる。

それに付け込み、逆転の一手を講じる つてのが爺ちゃんの勝利の理論らしい。

今は腰がヘルニアで大変らしいが、実家に戻る度に手合わせをしてもらっている。

「す、凄い人ですね……」

「ある意味化物だよ、あの人は。だからあんな呼ばれ方してたみたいだし」

古くからの友人からは、とあるあだ名で呼ばれている。
ま、その件に関してはおじおい話すことになるだらうから、今回は
スルーするといよ。

「思つたより、頑張つたじゃねーか

ノーヴンさんにはしゃわしゃと頭を撫でられる。

妙に恥かしくなつて、「止めてくれてこよ」と言つが止めてくれない。

「あたしも褒めてあげるつスよ～

と、何故かウノンテイさんも加勢して、頭をくしゃくしゃにされる
こととなつた。

何かしら柔らかい物体が触れる感触があつたよつた気がしたが、き
つと氣のせいだらう。

うん、あつとやうに違ひない。

ケダモノです、変態です、不潔です、不純です！それから巨乳は
死ねえ！！滅べ、無くなれ！

後半は私怨だよな？

と詰つが、リコウ……お前なんで胸のサイズ気にしてるんだよ？

HAHAHA、ナニヨイツテイルンテスカ。フルメンテの際のAI
容器が人型で、それが貧乳のロリツ娘にされたとかそんな事アリ

マセン四?

ああ、そうだつたんだ……

巨乳ではなく、虚乳……と言つわけか。

跳馬印のあの冷血女めえ……

ちなみに、次回のフルメンテ予定日は再来月という事実をここに付け加えておこう。

第6話（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

今回は +9.49KB

倍近く増加します

描写は増えていますが、相変わらず主人公は負けます（笑）
修正前は相手の攻撃を見切つてた節があつたのですが、修正後は控えめに音で判断することに
グレードダウンしている気がしなくもない……

活動報告を書こうかと思ったのですが、前日まで県外に居たので……
TPPで一次創作が危うい立場にあるわけですが。

それでも更新は続けていこうと思います

まあ、心配していても何も解決しませんしねえ

次回更新も少々遅れるやもしそれません
感想くださると嬉しいです。

ではでは

ヴィヴィオとの組手は見事に完敗したが、学ぶべきことは色々あった。

反省点もあった。

それ以上にあの組手は楽しかった。

ギリギリの駆け引きと、それに打ち勝った時の快感は今まで感じられないかったモノだった。

もひ、あの毎晩の練習はきっとこの時のためのモノだって言つても良いくらいに。

勝敗だけで言えば、残念な結果に終わった。

今ではどうでも良いことだ。

今までの鍛錬は決して無駄ではなかった そんな証明になつてくれた気がした。

これは、意味のある敗北だ。

最近は勝負事から極力逃げ続けるような生き方をしてきた。田を背けて、最初から何もかも諦めたような、そんな生き方をしてきたんだ。

それは負けるのが嫌だから。

負けることは恥であると、心のどこかで思っていたのだろう。いくら負け続けてきた人生とは言え、負けに慣れるなんて、俺には出来なかつた。

プライドなんて、とうの昔にどこかに置き忘れちつた。だが、悔しいつて気持ちだけは昔から何一つ変わらずに……この胸の中にはあり続ける。

負けて当たり前 そういうつも、心のどこかでモヤモヤした気持ち。それが毎回のように積もりに積もって、心をへし折られちつたのかもしれない。

今日の組手での敗北は、そんな気持ちを抱くことはなかつた。負けたにも関わらず、憑き物が取れたような爽快感。

これまで清々しい負けつてのは、生まれて初めてな気がする。

だからこそ、こうこうのも“悪くない”なんて風に思えるんだろうな……

長つたらしく、モノローグで組手の総括を行つていたため気が付か

なかつたが、リオが田の前までやつて来ていた。

「先輩、私ので良かつたらどうぞー」

そして、彼女は首にかけてあつた白いタオルを掲げて笑顔でそんなセリフを言った。

かなりの汗をかいていたのを見て、渡してくれたのだらう。

実際にはそんなに動いていないにも関わらず、だ。

これの大半は冷や汗によるものだらうなあ。

脇とかやべえよ。

着替えを持ってくりやあ良かつたと少し後悔。
ま、シャワーはこの施設内にあるみたいだから、後で借りるといふ。

「悪いな、リオ」

素直に受け取り、タオルを顔に押し当てる汗を拭き取る。

「む……？」

妙な違和感を覚えた。

甘つたるいような、そんな香りがしたのだ。

果たして洗剤や、柔軟剤でこのような香りがつくるものだらうか？

普通は、いかにも“作りました”みたいな爽やかな香りの筈……

よくよく考えてみれば、これはリオが直前まで首からかけていたタ

オルだ。

つまり……？

使用済つて単語 えつちいですよね

リョウウコの声が施設内に響き渡つた。
その言葉を聞いて、思考が停止した。

ちよつと待つてくつやれえ？！

お、お、落ち着け！

取り合えず、もう一度タオルで顔を拭く作業に戻るんだッ！

「…………」

やはり、洗剤のモノとは思えぬ鼻腔をくすぐる柔らかな香り。
それを肺一杯に吸い込むと、何ともいえぬ安心感に身体中が包まれたような感覚を覚えた。

そんな俺の行動を見ていたリョウウコが叫んだ。

ケダモノです、変態です、不潔です、不純です！くんかくんかするなら私にして下さい！

「お前をくんかくんかしてもなあ……単に餽臭いだけじゃないのか？」

あまり第4・5世代型バイスを舐めないで頂きたいです！！防

錆処理へいらっしゃっています！

「ああ、論点はそこなんだ……」

そのセツフはまだじりじりかと言えば、私の言ひべきものでは……？
ちなみに、このやつ取りの間もずっと鼻とタオルは密着させたままだ。

いや……汗が中々ひかなくてね……他意はないよ？

「今のは、デバイスの声……？」

そんな俺の心中を知らず、リオがちょこんと首をかしげてみせた。
相変わらず、小動物染みた動きの可愛いらしい娘だ。

「ん、ああ……コイツか」

「専用デバイス持つてたんですか？！」

コロナが驚嘆の声を上げる。

待機状態のリョウウコを取り出して、彼女に見えるように掲げる。

いや、まあ俺が専用デバイス持つてのに驚くのは理解出来るけど
れ……

それでも、その驚きよつこよけようと傷つくなへり……？

「一応、だけどな……」

お初にお田にかかります。私の名は竜驥虎視。気軽にリョウウコお姉さまとお呼びください

何故に“お姉さま”呼称を要求しているんだよ……？

と言ひうか、主……いつまでタオルの匂い嗅いでるんですか？

「ハハハ、何を言つているのかね。俺は顔の汗を拭き取つていろだけじゃないか

かなり声が上擦つてしまつた氣もするが、流石に真実を告げるわけにはいかんだけれど。

女の子って不思議だよな。

男の体臭や汗臭さつてのには、顔をしかめてしまつへりこの不快感を覚えるものなのに。

「も、もしかして汗臭かったですか？！あんまり汗かいてなくて、殆ど使つてなかつたから大丈夫かと思つたんですけど……」

いつにない慌てぶりだった。

顔を真つ赤にして、両腕をぶんぶんと振り回している。

可愛いいなあ、なんて感想を心中で呟きつつ、事態の收拾方法を考える。

「いや、異臭などはしなかつたぞ？寧ろ良い匂こと言つたか……」

後半のセリフは不要だったことに気付いたのは、既に発言した後であつた。

つい本音が出てしまつた……

「明日図書館で良いか?」

「?」

俺の問い合わせが伝わっていなかつたらしい。

「いや、タオル返すのにつにすりや良いのかつて話だ

「こう場合は、洗つて返すのが道理といつものだ。
それに俺の汗臭いタオルなんぞ、渡すのは気が引ける。

「別にこの場で返してもらえれば良いですよ?先輩つて妙なところ
で律義な人ですよね」

「む……」

「うこう場合ひじきうこう反応すりや良いんだよ……

「それよりも、組手凄かつたですよ」

「そりかあ?確かに、小手先だけの技でよくあそこまでやれたとは
思つたけどさ」

「ロナが田をキラキラさせて褒めてくれた。

「柔よく剛を制すつて感じでした」

「むー、それじゃあわたしが馬鹿力みたいだよお」

「だがな、ヴィヴィオ。パワー・バランス的にはそういうわざを得ないのだよ」

「そんなんあー」

女の子的には“剛”扱いは嫌なものらしい。
ちなみに、もう既に大人モードを解除しており、クリスがタオルを持つて彼女の周りをふわふわと飛んでいる。

そういうや、あの魔力管理クリスがしてたんだよな。
倒せそうで倒せないっていう絶妙なコントロールナイスだつたぜ、
と心中での兎さんを褒めておく。

クリスはどういう原理が知らないが、その意図に気付いてグッとガッソーブを作る。

わあ、可愛いなあ。

ウチのとは大違いだ。

今何か、失礼なことを考えませんでしたか？

「何も……えーと、タオルは返せば良いんだっけか」

「はい。あんまり気にしないでください。今回の組手の見学料ですから」

「ん、そつ思つことにするよ。ありがとな」

タオルをリオに返却した。

「……男の人の汗つてこんな匂いなんだ。ヴィヴィオー、嗅いでみる？」

そんな言葉が聞こえてきた。

この流れは予想外だよッ？！

リオはヴィヴィオに問いかけつつ、タオルを彼女の顔に近づける。

ちょっと待つてえええ！！！

見事なカウンターですよね

全くだよ！

「不思議な匂いですね」

ニッコリと笑顔でそんな感想を告げられた俺は、一体どんな表情をすれば良いのだろうか？

「口口ナも嗅ぐ？」

「嗅がないよッ！」

頬を朱に染めながらコロナが即答する。

「全然臭くはないよ」

「もうこの問題じゃないよ。」

「口ナさんつて……多分耳年増ですよねえ

それは、何となく予想がついてたけどな。

多感なお年頃だから、やがていつに興味があるてもおかしくなった
うつよ。

156

というか、それ以前に！

「Jの謎の羞恥プレイはいつになつたら閉幕するんだろ?つか……?」

「うううのこ、一番耐性がないのは、主なのかもせんね

「かもな」

その後約5分ほど羞恥プレイが続いたが、施設の閉館時間が迫つていたため終了した。

「今日、どうでしたか？」

すっかり田の沈んだ道を歩きながら、ヴィヴィオが問ひ。

「まあ、思ったよりもずっと楽しめたよ」

素直な感想を一言述べる。

「誘つた甲斐がありましたね」

「そうだな。ありがと、誘つてくれて嬉しかったよ

この時ばかりは作り笑顔ではなく、心から笑えていたと思つ。

「そ、ですか。また誘つても……良いですか？」

「あ、ああ……」

その上目遣い+頬染めは反則だと思つんですね。

いや上目遣い自体は俺の方が身長が上だから、仕方のないことだけ
じや。

「なあに照れてるんスか～？」

「照れてねえよ……」

ウーンディさんのツッコミはもつともなのだが、体裁上否定せずにはいられなかつた。

「悪い、チビ達送つてやつてくれるか?」

「あ、了解つス。何か用事でもあるんスか?」

「救助隊の装備調整でな」

その“チビ達”の中に俺は含まれてこりのだらつか?
そもそも俺は方向違うんだが……

ノーヴルセラピーワークのやつ取りを覽あつて、そんな事を
を考えていぬと

「涼、お前方向逆なんだろ?」

「ええ、やつですが……?」

「途中まで送つてから

「女性に送つてもひつひつのは複雑な気分ですね……」

「子供は黙つて甘えとこ」

「子供、ですか……」

ぐいっと襟首を掴まれて、引っ張られる。

「じゃ、またな。おい行くぞー」

「痛い、痛い 引っ張らないでくださいよー」

「おつかれさまでしたー！」

ヴィヴィオ、コロナ、リオ、ウェンディさんと別れて、俺とノーヴ
Hさんの2人きりになる。

つて、あれ？

2人きり？

おいおい、思春期の少年にはちいーっとばかり刺激が強いんじゃあ
ないだろ？

何かしら嬉し恥ずかしのイベントがあつたり……？

「そういえば、ノーヴHさんって救助隊員なんですか？」

先程のウェンディさんとのやり取りを聞く限り、彼女は救助隊員の
関係者らしい。

「言つてなかつたか？」

「聞いてませんよ。それ以前に、今日お会いしたばかりじゃないで
すか」

「それもそうか」

ノーヴHさんの隣を歩く。

何だ、この妙な気恥かしさは？

「正規の救助隊員じゃなくて、技能訓練受けたるだけだ」

救助隊とは災害の際に人命救助を担当する部隊で、危険な場所へ突入したりするので、部隊員1人1人に高い能力が要求される役職だ。エリートだな、所謂。

だが、当然危険と隣り合わせの仕事でもあり、救助中に巻き込まれて死亡するというケースも決して少くはない。

「いざれはなるんですね？」

「まあ、受かるかまだ分からねえが」

「ノーヴェさんなら大丈夫でしょう」

「さりげなく、ハードル上げるなよ」

「夢がある人は強いですからね」

「……そうだな。お前も何があるんだろ？」

「サッカー選手」

「嘘だろ」

「まさか、こう見えてエースストライカーですよ。ゲームの中では

「大人をからかうな」

軽く頭を叩かれる。

手首のスナップが凄い利いてて、結構痛い。

「俺は魔導師になりたいんですよ」

「それって管理局のことか?」

「まあ、そうですね。独自捜査と逮捕権限がある魔導師なら何でも良いんですけどね」

「夢はでっかく執務官か特別捜査官つてところで良いんじゃないかな?」

「……無理とか言わないんですね、貴女は」

「ま、あの数値の魔力量じゃ厳しいだろうけどな。お前なら何とかしちまう気がしてな」

「……」

「組手にしても最初は一本取れりゃ良い方だと思つてたんだが、互角に打ち合つて見せたじゃねえか」

ノーヴンさんはこちらをじっと見据えて笑顔で言った。

アレは互角に見えるようにヴィヴィオが手加減してくれただけだ……俺が強いわけでもなんでもないんだ……

「だからお前は誇つて良いんだよ。自分の努力や力つてやつを。卑屈になりすぎると伸びるもんも伸びなくなるぞ」

「そ、そりですか」

身内以外にこんなに褒められたのは初めてかもしない。
なんつーか、照れるな……

「おひ、照れてるのか?」

「おひ、違いますよ!」

「顔赤いぞー、案外可愛」というあるじやねえか

ハハハ、と笑いながらまた頭をぐしゃぐしゃと撫でられる。

どうにも、ペースが乱されるな。
悪い気はしないけど……

「逮捕したい相手でもいるのか」

その一言で一気に冷静な自分に引き戻される。

そうだ

俺が魔導師を志す理由。

実際に醜い理由だ。

「無理して言わなくとも」

相当酷い顔をしていたのだらう、気遣つてそんな言葉をかけてくれる。

「復讐ですよ、単なる」

忘れもしないあの人物の顔を思い浮かべる。

「復讐……」

「親の敵つてヤツです。絶対豚箱に送り込んでやるつて言つて至極単純なものです」

「逮捕されてないのか」

「一コースを見る限りは。ま、相手の名前も知らないんですけどね……顔だけは覚えているんですけどね」

悪魔にでも取り憑かれたような 人間の表情とは思えないほど邪悪な笑みを浮かべるあの男。

「顔だけって言つとかなり厳しいな。年月が経てば忘れちまつ」ともあるだらうし

「絶対に忘れませんよ……田の前で両親を殺した男の顔は……」

「そう、か

「でも、多分実際に出来たら頭の中真っ白になって、どんなでもない」になりそうだ……」

- 1 -

「そのときは、止めてくれませんか？きっと本気で殺しこなかつて
ると懲りで」「

冗談ではなく割と本気で言つてゐる。

分かつた

そう一言の返事を聞いて、何故か凄く安心している俺が居た。

中途半端に過去のことを話したのは、単に同情して欲しかつただけなのかもしない。

どうしようもなく弱い人間だから

「そりやが、今度連休あるだろ」

「ああ、そういうやそなイベントもあつまつたね」

試験明けは、土日祝日も含めて5日間の試験休みがあるので、毎年俺は補習や再試が入るので、例年連休などないに等しい。

「何か予定入つてるか？」

「試験の結果が悪ければ補習が入りますね。何があるんですか？」

「毎年旅行兼合宿みたいなことやつててな。ヴィヴィオたちも行くから、お前もどうかなーってな」

「しかし、初対面の面々も当然居るわけですよね……？」

「まあ、な。来て損はないと思うけどな」

「うーん……」

「そりこや、ヴィヴィオが来るといつことは……

「もしや、かのエースオブエースもいらっしゃるですか？」

「今のことじり来る予定だな。魔導師ランクAAからオーバースランクまで」

「行きますー！」

断る筈がない。

断る理由がない。

図々しいと思われようが、俺は絶対行くぞ。

オーバースランクつて局に数パーセント位しか居ないのだろう？
是非お目にかかりたい。

魔法の使用効率云々の話とか、術式改変の上手い運用の仕方とか色々聞きたいことがあるし。

それからそれから、魔力量と効果の比例条件は覆るのか、とか。

瞬時展開によるメリット、デメリットの話とか。

デバイスの魔力管理の有無による術者の負担軽減率とか。

「向こうにまだレアな伝記本なんかもあつたりするから、参考になるかもな」

ヤバイ、凄いよ。

ノーヴェさんめっちゃ良い人。

初対面で少し怖いとか思つてごめんなさい。

だが、ある問題点を解決しないとな……

「補習を回避しなければ、参加できない……」

地べたに膝を付ける。

筆記試験は良しとして、実技試験はどうする？

魔力量からしてそもそも発動不可能な魔法に関する試験をされても困る。

術式を弄れば、効果は落ちるが何となるだろ？……？
でも、あの手の遠距離行使するタイプの術式って難しいんだよなあ。

背に腹は変えられまい……数日の徹夜で何となるか？

「そりいや、学院つて魔法実技あつたっけ……」

「やつなんですよ。最近は俺に扱えない魔法ばかりですよ」

「頑張れ、としか言ひようがないな」

……この違和感は？

会話中だったが、独特の違和感を感じて思わず閉口してしまった。この違和感を例えるなら、鋭利なモノを額に突き付けられたような、そんな違和感。

この違和感の正体を、俺は誰よりもよく知っている……

魔力だ

この違和感は間違いなく、魔力によるものだ。

些細な放出量かもしけないが、徐々にこじらとの距離を詰められて
いる。

ゆっくりだが、着実に距離は縮まつてきている。
距離的にノーヴェさんのモノじゃない。
だったら誰の？

ヴィヴィオたちか？

いや……彼女たちならば、要件があれば情報端末で伝えれば済む話。

じゃあ、一体誰だ……？

「どうした？」

俺の異変に気がついたらしく、瓶を殺したハーガーHさんが尋ねてきた。

「恐らく跡をつかりています……」

「やはりも壇を殺して回答する。

「どうか分かるか？」

片田を闇じて魔力を追つ。

「街灯の上を移動し」

やつ言いかけたといふで

「ストライクアーツ有段者、ノーグ・ノーグ・ナカジマさんとお見受けします」

先に動いたのはあちらさん。

月を背に街灯の上に立っていた……何とも器用なことだ。

顔はバイザーで隠していて見えない。

だが……若いな。
つてか、若い女性がスカートでそんな高ことじりに立つんじゃありません！

見え……ない。

何だ、この見えそうで見えない感じ……これすらも計算通りだと言うのか？

まあ、ふざけるのはこの辺にしておいて……

「貴女に幾つか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事があります

「質問すんなら、バイザー外して名を名乗るのってのが筋つてもん
だろ」

「失礼しました」

スッと何の迷いもなくバイザーを外す。

顔を見られても構わないとてのか……？

長い碧銀の髪
そして青と紺のオッドアイ。

その姿を見て、自分の知るある人物が脳裏によぎった。

金髪に緑と赤のオッドアイ

高町、ヴィヴィオと似た雰囲気を感じる。

魔力特有の違和感の波長が……似ているからだろ？

「カイザーアーツ正統ハイティ・E・S・イングヴァルト
王」と名乗らせて頂きます」

“ 霸

彼女は堂々とそつ名乗った。

自身がかつての王であると。

“ 霸王”であると

第7話（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

今回は +5.2KB

間に合わないかと思ったのですが、普通に間に合つたので予定通りの更新となりました。

戦闘回に増加量は少なめですが、タオルの下りを追加しました。主人公の性格がかなり残念になっている気がしなくもない……

感想くださると嬉しいです。

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710x/>

魔法少女リリカルなのはViVid Another Story

2011年11月20日05時39分発行